

求道

第壹卷
第九號

求道第一卷第九號

目次

- ◎信仰的生活論 (社説) 楠龍造
- ◎聖財集を讀む 日曜講話 近角常觀
- ◎信心歡喜の靈感 前田慧雲
- ◎感應 ▲極樂淨土論 松本文三郎
- ◎人生を愛すべし 同一鹹味 求道學人
- ◎南村閑話 一記 者
- ◎無題錄 鈴木卓苗
- ◎實驗の泉 百目木劍虹
- ◎親燈錄 鶴田耿介
- ◎妖覽曲 風尚餘韻 波岡しげる
- ◎曉 しげ
- ◎秋の句 和軒生

◎秋草 ◎學習院丁祭詩

▲新刊紹介▼
改教時報

- ◎編輯だより
- ◎道即佛也
- ◎杜陵の秋
- ◎嗚呼友雄
- ◎獨逸だより

歌介
板倉興太郎
昆一郎
八田智證
渡邊海旭

求道學舍

傍廳
隨意
每日曜午前九時より本郷森川町一番地に於て

第二求道會

傍廳
隨意
毎土曜日午後二時より九段佛敎俱樂部に於てあります

求道

第一卷
第九號

求

信仰的生活論

秋曉森森として靈氣空に滿つ、雞鳴否に起きて、深浴して口を嗽ぎ、野花清香を佛前に捧げ、聖鈴一振して同胞靜室に集る。肅みて聖教を輪讀しつゝ、心中深く念じて曰く。幸に佛陀の慈光に浴して以て今日一日清淨なる生活を享くるを得むと。乃ち勿々として衆務を營む。既にして夕陽西山に傾き、燈影窓に在り、枯坐終日爲す所を顧る、其期する十が一にも及ばずと雖、而も猶身健に幸に佛天の加祐を被る、乃ち慈恩の極なきに仰嘆して感謝の情胸に溢る。嗚呼人生若し信仰の生命なかりせば、吾人亦何の爲にか織り、何の爲にか耕さむ。吾人の寢に即くや、未だ一日も理想的生活を營み得たりと考へたることなし。然れども若し慈光の安慰を仰くに非らずむば、恐くは一日も此の如く生存し能はざりしならむ。嗚呼信仰的生活や其味深くして、且つ遠し。嗚呼信仰は人生をして美化せしむるの光なり。人生をして生氣あらしむる命也。

道 (一)

想ひ見る。釋尊の教團を帥る玉ふや、常に清旦、森林より出て、衆弟子を伴ひ、安詳として食を市に乞ひ玉ふ。蓋し是れ朝曦、霞を破りて草木欣々として笑ふが如く、秋宵月清くして衆星に圍繞せらるゝが如けむのみ。世人或は原始の教團を以て、恰も人生を無視し、肉体を蔑如し、徒らに灰身滅智を樂むが如く考ふるもの多し。吾人の信する所大に異なり。抑々釋尊は當時の印度教が苦行を以て解脱の手段なりと誤解せるを警醒して、中道以て健全に道を求むべきを教へ玉ひしもの。既に入正道の教訓の如き最も健全にして且つ適切なる修養法たらずむはあらず。特に正命と云ふが如き最も清淨中正なる生活を意味するものにあらずや。蓋し家を出て道を求むるに至りては、一層眞摯に出づべきの要あるが爲に、其出家の戒律の如き頗複雑となるに至る。然りと雖、若し其精神を攫取し來らば、畢竟是れ諸の場合に於ける注意を密にせしに過ぎざるのみ。況んや、在家生活

に至りては、其訓誡簡單にして適切を極む。請ふ、左に掲ぐる佛陀が尸迦羅越に垂れ玉ひし訓誡を見よ。

一、兩親及子供

兩親は左の如く爲すべし。

子供は左の如く言はざる可からず。

- 一、子供を惡事より遠くる様に制すべし。
- 二、子供を道德に於て訓練すべし。
- 三、藝術及科學を子供に教ゆべし。
- 四、適當なる妻若くは夫を子供に心配すべし。
- 五、彼等の遺産を子供に與ふべし。

二、生徒と教師

生徒は其教師に對して左の如く愛敬すべし。

- 一、教師の前には起立すべし。
- 二、教師に奉事すべし。
- 三、教師に従順なるべし。
- 四、教師の需要を供給すべし。
- 五、教訓を深く心に銘せよ。

三、夫と妻

夫は左の如く其妻を慈懷すべし。

- 一、尊敬を以て妻を取扱ふべし。
- 二、親切を以て妻を取扱ふべし。

- 一、我を養ひ玉ひし兩親を養ひ奉らむ。
 - 二、兩親に負ふ家庭的本務を遂行せむ。
 - 三、兩親の財産を保ち守らむ。
 - 四、兩親の後繼たるの價值ある人物とならむ。
 - 五、兩親逝き玉ひし後は、追善を大切にせむ。
- 教師は其生徒に對して、左の如く其敬愛の情を表すべし。
- 一、凡て善事を爲す様生徒を訓練すべし。
 - 二、智識を確かに保つ様に教ゆべし。
 - 三、學術及訓誡を教ゆべし。
 - 四、生徒の友人及同僚に對して、生徒の事を善く話すべし。
 - 五、危難に陥らざる様生徒を衛るべし。

妻は其夫に對して左の如く親愛すべし。

- 一、秩序正しく家政を整理せよ。
- 二、家族及友人に對して丁寧なる妻たるべし。

- 三、妻に對して眞實たるべし。
- 四、妻が他人より敬せらるゝ様にすべし。
- 五、適當なる飾と衣とを與へよ。

四、友人と同僚

紳士は其友人に對して左の如く交際すべし、

- 一、贈物を與ふべし。
- 二、懇懃なる言語を用ゆべし。
- 三、友人の利益を増進すべし。
- 四、全く平等に交際すべし。
- 五、友人と共に自己の繁榮を分け前せよ。

五、主人及婢僕

主人は從屬の幸福の爲めに左の如く給與すべし。

- 一、婢僕の方に相應して、仕事を命ずべし。
- 二、適當なる食物と給金とを與へよ。
- 三、婢僕病氣あるときは之を養生してやるべし。
- 四、不意なる美味あるときは婢僕と共に分前せよ。
- 五、時時、婢僕に休日を許し與へよ。

六、俗人と僧侶

紳士は僧侶に對して左の如く奉事すべし。

- 三、貞操なる妻たるべし。
- 四、節儉なる主婦たるべし。
- 五、其爲すべき萬事に於て熟練と勤勉を示すべし。

友人は紳士に對して左の如く愛情を表すべし。

- 一、彼衛なき時は私かに彼が爲に注意すべし。
- 二、彼注意なき時に蔭ながら其財産を衛るべし。
- 三、彼危難なる時隠れ家を彼に給すべし。
- 四、彼不幸なる時彼と離れず密着すべし。
- 五、彼の家族に親切を表すべし。

婢僕は主人に對して左の如く愛情を表すべし。

- 一、婢僕は主人に先ちて朝早く起くべし。
- 二、婢僕は主人に後れて夜寝に就くべし。
- 三、婢僕は與へられたる物を以て満足すべし。
- 四、婢僕は愉快に且つ確實に働くべし。
- 五、婢僕は主人の事を善く話せ即ち適當に話すべし。

僧侶は紳士に對して左の如く愛敬を表すべし。

- 一、愛敬の行を爲すべし。
- 二、愛敬の言語を用ゆべし。
- 三、愛敬の精神を懐くべし。
- 四、心易き挨拶を僧侶に拂ふべし。
- 五、僧侶時々の需要を供給すべし。

- 一、彼を惡より避けしむべく誠むべし。
- 二、彼を善に進ましむべく勵ますべし。
- 三、彼に對して心中親切に感ずべし。
- 四、宗教上彼を教育すべし。
- 五、彼の疑問を晴らさしむべし。

六、向上の一路を指導すべし。

何ぞ其教訓の穩健にして情理兼備はるの到はれるや。試みに其語氣と情愛とを攫取せよ。決して教權を以て臨むにあらず、律法を以て規するに非ず。殊更に階級を打破し、秩序を壞亂せむとするものにあらず。之を要するに唯内心の調和と思想にあるのみ。看よ其父子の關係を説くや、教權の忠孝主義にあらず、當世風の親子義務論にもあらず。要は親子の人情より割り出したる教訓に外ならず。親は子に適當なる教育を與へ、且つ遺産を譲るべしと云ひ、子は後繼者たるの價值ある様に人格の修養を爲し、且つ親の譲り與へたる財産を保つべしといふが如き、蓋し平凡の間に深趣ありと謂つべきが。次に生徒教師の關係を説くが如く教師必ずしも嚴格を以て之に臨まず、生徒亦形式的尊敬を以て之に侍せず。生徒は深く教師の人格を敬慕し、教師亦滿心の慈愛を以て之を翼護す。第四第五の訓誡の如きは實に痒癢を搔くが如し。古の師弟の關係嚴格を極めて情愛の少き現時の師弟恰も路人の如くなる、皆此訓誡に反省せざるべし。次に夫妻の關係を説くに至りては、其適切なる恐くは確かに世人の一驚を價すべし。蓋し世人動もすれば佛教を以て男尊女卑の思想を有するものと誤解するものあり、是大に非なり。蓋し或は印度に於て其思想あらむ。佛教は之に反して男女平等に解脱を誨め、佛陀の教團に女子をして在家出家の弟子たるを許すこと男子と毫も異なるを見ず。變成男子、女人成佛の思想の如きは從來印度思想に於ける男女の區別を見ずして、内心解脱の實驗に於て其優劣を認めざるを表せしもの、却て之を以て佛教の平等主義を徵すべきにあらずや。恰も佛陀の教團は階級制度を以て痼疾とせる印度の化石的社會中に於て、四姓の區別を見ず、内心の實驗に於ては同一鹹味と爲すが如けのみ。然れど

も男子は男子の道あり、女子は女子の道あり、各其性に從ひて其職を異にするを辨ぜざるべからず。而して夫妻の關係を説く琴瑟相和して空中天樂を聞くの想あり。而して從來家庭の缺點たる男子の妻に對して愛敬を缺き不貞なるが如き、又妻か夫の家族と睦しからざるが如き、確かに頂門の一針を價す。蓋し家庭の問題、婦人問題の如き此釋尊の訓誡を味は、立處に之を解決するを得む。次に友人同僚の關係の如き其着眼點の如何に急所を抑へたるかを知るべき也。言語を丁重にせよと云ひ、利益を増進せよと云ひ、平等に交際せよと云ひ、繁榮を分け前せよといふが如き、特に私かに保護せよと云ひ、危難不幸の時見捨つる勿れと云ふが如き現時輕薄なる交際社會を戒むるに足る。次に主人婢僕の關係の如きは移して以て將來勞働問題、若くは社會問題解決の鍵鑰たらむかな。要するに一片是れ思ひやり過ぎざるのみ。不意なる美味あるときは之を婢僕に分前せよといひ婢僕は與へられたるものを以て満足せよといふ。何ぞ音諧の調和其妙を極むる、最後に俗人と僧侶の關係の如き、都て愛敬と同情とを精神としたる、特に向上の一路を指導すべきを以て之を結歸せる、洵に親しく釋尊の御聲を聞き奉るの感あり。豈眷々として聖訓を服膺せざるべしや。

已上擧ぐるところの釋尊の訓誡が何が故にかく適切にして同情に富めるや、蓋し是れ單に普通の道德律の如く、徒らに乾燥なる行爲の標準を列記したるものにあらずして、人心の根底を獲へし來りて、人間としての弱點、人生に於ける苦源、人心に於ける煩悶の根本を洞觀し、佛陀絶對の慈光を以て此等無明の闇黒を燒き來りて、此に廓然明朗の妙境に達し、翻て人生の苦海に沈淪せる吾人を顧み、哀々の極遂に此の如きの訓誡を下し玉ひしものならずはあらず。此に於てや吾人此等の教訓を味はむとするもの、必ずしも之を以て律法として勵行せむとする是不可なり。之を教權として盲從せむとする是不可能也、吾人は亦人間としての弱點、人生に於ける苦源、人心に於ける煩悶の極に達し、佛陀絶對の慈光を蒙るにあらずは、未だ眞個に信仰的生活の妙味を體得すること能はざるべし。

抑々吾人日常の行爲を顧るに、常に慚愧として慚色あり。吾人常に信仰問題を口にし、日夜佛陀の靈前に咫尺す。而して猶上に列記せしが如き訓誡を眞摯に實行する能はず。吾人信仰生活に入りてより既に八年、而して自ら以爲らく、依然として

猶ほ當年の如し。抑々人間は飽迄人間也、煩惱由來無盡藏、吾人何の時か抗顔我修養を爲し得たりと揚言し得るものぞ。親鸞聖人曰く、一切の群生海無始より以來乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心なく、虚假詭偽にして眞實の心なしと。豈力強き鐵案にあらずや。一切の群生海と云ひ、今日今時までといふ、苟も人間たる者此一言に對して五體を地に投じて求哀懺悔せざるものやある。看よ、汝が態度を見よ、何ぞ賢者の相を現する。汝が標榜を見よ、何ぞ殊勝の態を裝へる。汝が言ふ所、何ぞ切實なる。汝が行ふ所、何ぞ悲憫なる。而して醜て汝が内心をみよ、汝の深奥を穿て、汝の發作を顧み、汝の本質を檢せよ。汝時として善を爲さむとす、汝果して喜びて善をなすか。汝勵みて慈惠を行はとす、汝の中心之を喜ふこと水の下きに就くが如くなるか。親鸞聖人嘆して曰く、外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虚假を懷けば也。貪瞋邪偽奸詐百端にして惡性止め難し、事蛇蝎に同し、三業を起すと雖、名つけて雜毒の善とす、又虚假の行と名く、眞實の業と名けざる也。若し此の如く安心起行を爲すは假令、身心を苦勵して日夜十二時に急に求め、急に作して、頭燃を拂ふが如くするもの、すべて雜毒の善と名く、此雜毒の行を廻して彼佛の淨土に生せんことを求めむと欲するは是必ず不可也と、嗚呼誰か此心血滴るが如き呵責に對して心を塞くせざるものやある。誰か我律法を勵行し得たりといふ。誰か我教權に服従したりといふ。又誰か我道德的生活を全ふしたりと揚言するものぞ。

開極りて光を見、雨晴れて月清らかなり。土は如何程穿つも土也、鐵は如何程磨くも鐵也。而も其土中忽ちにして清泉迸り出て、景丹の一粒は鐵を變じて金とす。親鸞聖人嘆じて曰く、此を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行し玉ひし時、三業の修し玉ひし所、一念一刹那も清淨ならざるることなし、眞心ならざるることなし。如來清淨の眞心を以て圓融無碍不可思議、不可稱、不可説の至徳を成就し玉へり、如來の至心を以て諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に廻らし玉へりと豈偉大なる力にあらずや。豈廣大なる光に非ずや。無始劫來の長夜、生死流轉の苦海此に初めて彼岸巖頭に輝ける絶對無碍の一大光明臺を得たり。嗚呼實に是れ信仰の生命也。人生の光也。

旭日閃きて惡魔忽ち影を潜む、惡といひ、善といふ、首を回らせは昨夜夢中の幻影ならくのみ。唯吾人の眼中に映じ來るもの、といふことをは沙汰なくして我人も善し惡しといふことをのみ申し遇へり、聖人の仰せには善惡の二つ總じて以て存知せざるなり。其故は如來の御心に善しと思召す程に知り通したらばこそ善きを知りたるにてもあらめ、如來の惡しと思召す程に知り通したらば惡しきを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は萬の事皆以て空言たわ言、まことあることなきに唯念佛のみぞまことにておはしますとこそ仰せられ候ひしかと。

此に至りて人生は唯絶對の慈愛あるのみ。無碍の光明あるのみ。親子、師弟、夫婦、朋友、主従、僧俗、皆是人生の上に反射し來りたる慈光世界にあらずや。人間の上に下り玉ひし菩薩の權化にあらずや。和讃に曰く、觀音勢至もろともに、慈光世界を照耀し、有縁を度してしばらくも、休息あることなかりけりと。時に窓前の秋色煙雨の中に罩められ、數杵の暮鐘感謝の念を促す。行李匆匆我將さに北の方松洲灣頭有縁の地に道を傳へむとす。嗚呼皆是慈光界裡の生活ならざるなし。噫。

抑々此去ぬる九月盡之比より、予が申せし事は春夏の間は、人の心も萬にまぎれて情もおさまらざる程に、秋冬は夜もながく時分もよければ、佛法の物語不審などもあらん人々におひては法義をも讃嘆し、一はしいひきかせ、又たづねんことをもこたへんとおもふ志のあるによりて、この座敷に當年は一縁に居住すといへども更に老若ともに死言のみにて、さてはつる跡なれば堪忍せしめたるうの所陰一つもなし。さる程に九月の比より十二月の末つかたになりゆくあひだ、すてにはや年もくれなんとす仍て愚老は年齡つもりて六十九歳ぞかし、今四五日きたらばすてに七旬にきはまりぬべし。又來年の此比までも存命せんこと不定なるべし、返々口惜き次第もなり。たれありてさしたる法義を不審せしめたる人つみに一度もこれなき間、本意の外に思へども今に於て後悔なきにたゞざる次第なり。面々各々にせめてうの心中ひとつもあるべからず、たゞ典樂ばかりあればられを食せんと思ふ心中ばかりの人なり。所陰典樂を興行することも、あながちに食せんためその志ばかりにてはなきなり。之に就て人々の佛法心もつきやせんと思ふばかりのことこそ張行はするなり。さればたま／＼一帖の聖教をもこれをよみぬれば、人みな目をふさぎてきくよしの跡たれは、さながら座頭房にことならず、あさましく。又千に一つものなきける輩は佛法の底をばしらず、一端の磯をききしを以て人にかたりてわが名望とおもへるこそ近代以外の繁昌なり。さるほどに、今日此比は年もくれなむとすれば、正月にもなりなげにも祝賀以下人々の出入につけひまもいり、又人間のすまむなれば意はとけれども、世間につけ王法につけ遊げなんともありぬべし。このゆへに愚老がかれてより申すことこれぞかし。秋冬ならては佛法の物語はこゝろのとまらぬよし、人々に申しづるなり。相かまへ、又くる年、くる年の覺悟をなすべきことなり。すてにはや今四五日もすぎなば、人々の心、ものいうがはしく遊覽の跡になりぬべきものなり。あなかし。

聖財集と讀む

楠 龍 造

一日閑餘無住法師の聖財集を讀む、法師は今を去る六百七十九年前即ち後堀河天皇嘉祿二年を以て生れ、壽八十七歳にして花園天皇正和元年を以て逝きぬ、學入宗に涉り識顯密禪に徹し、所謂宗派の偏頗心を去りて直に諸教の心腑を捉へ、溶融一貫、高く當時の俗流に超絶せりき、道心堅固而かも和醇の氣溢れて人心を感化すること磁石の鐵を吸ふが如きものありき、今其著書聖財集を讀みて偶々我心にふれたる一二を論究せんと思ふ。

禪教論

聖財集中十之四句なるものあり、曰く、(1)今世後世(2)外典内典(3)神明佛陀(4)多聞智慧(5)福德智慧(6)解行(7)乘我(8)根遮(9)染淨(10)禪教これなり、此十個の問題を單々俱非の四句を以て分別するなり、今は第十の禪教に就て其意をとりて少しく吾人の所感を述べん。

題して禪教論と云ふ、禪教とは何ぞや、古來禪家一代佛敎を判釋して禪と敎相の二となしぬ、禪は文字言句の閑葛藤をはなれ直に以心傳心本來の面目を達觀せんとするものなり、敎相は文字言句の方便をかり理義の穿鑿を事とし、遂に安心不動の立脚地に到達するを云ふ。かくて禪家は敎家を罵り、無用の手段方便にかゝりはて、本來の目的を忘却せる擔板漢なりと云ひ、敎家は禪家を排して手足なくして口のみ巧みな

る増上慢の大邪見人なりと云ひ、紛々相争ふは常なりと云われど醜之を思ふ、禪教は方圓相容れざる如くしかく相反撥すべきものなりや否や、若し其究竟目的より云へば禪教共に迷情を打破して安心不動の地位を得んとするものなれば、同じ高嶺の月を見るに於て甲乙の相違あるべからざるなり、唯一は直に心源を見よと云へは手段方法の順序を経て其極に至らんとする差異のみ。敎禪融會の大家圭峯禪師之を裁斷して云へるあり、曰く、

今時弟子彼此源に迷ふ、修心者經論を以て別宗と爲しぬ、講說者禪門を以て異法と爲しぬ、若し因果修證を説くを聞けば、便ち推して經論の家に屬して而かも修證まことに是れ禪門の本事なるを知らず、即心即佛を説くを聞けば、便ち推して胸襟の禪に屬して心佛まことにこれ經論の本意なるを知らず。

明斷能く二家の愚葛藤を打破して餘ありと云ふべし、抑敎禪の争なるものは之を廣意義に解釋すれば、一は直に迷情を打破して心源を觀せんとするもの、今日の所謂信仰派實感派と稱するものの直に信仰の真髓を自覺せんとつとむるものとや似たる所あり、一は文字言句の階梯により理義を辨別し修行の功德を積み、遂に安心の大道に到達せんとするは、合理派自由討究派とや一致せるものあるを覺ゆ、而して信仰派實感派なるものは合理派討究派を嘲りて理義の穿鑿にかかつらひ無用の空言空論を弄するを笑ひ、合理派自由討究派は信仰派實感派を目して曰く、彼等は女々しき感情の奴隸となり理義の眞を没して獨り得々たるを笑ふ。されど此二者本來

の性質としてしかも相背反せざるべからざるものなりや否や、吾人は思ふ、圭峰禪師其人をして若しも今代に生ぜしめんか、必ずや云ふものあらん、

今時敎家彼此源に迷ふ、信仰派は理義の討究を以て別宗と爲しぬ、合理派は信仰安心を以て異法と爲しぬ、若し理義修證を説くを聞けば、便ち推して合理派に屬して而も理義修證まことに是れ信仰安心の本事なるを知らず、信仰實感を説くを聞けば、便ち推して信仰派に屬して信仰實感まことにこれ合理派の本意なるを知らずと。

歴史は同事件を繰りかへすものなりとは、不朽の金言なり今代の疑問は昔日の解釋によりて了然たるものあるなり、吾人は敎禪の融會をみて信仰合理二派の一致すべきを知る。されど敎禪二家各亦一長一短なくんばならず、そもく人をして安心の要道を得せしめんとするや、必ずや二個の或物を要す、或物とは何ぞや、

- (1) 機關
(2) 理致

機關は理致に達せしむる所以の方法手段なり、理致は究竟目的なり、敎家に於ては機關は敎義にして理致は禪の達觀なり、然るに敎家の弊や、もすれば獨り機關の末に拘泥して理致を忘却して顧みざるものあるに至る、これ禪の敎家に向て一喝を下す所以此處にあり、されど其機關整備の點は大に嘉納せざるべからず、禪は直覺や直に理致に觸接せんとするもの、其機關は麻三斤と云ひ庭前の柏樹子と云ひ、これ激藥にして一般に用ひ易すからざるなり、禪はたとへば食の停滯せ

るにあたり下劑を用るが如し、頓に心身の爽快を覺ゆ、されど次に補劑を用ひて身体の健康を増進せざるべからず、悟後の修行と云ふものまことにこれなり、之を要するに禪は頓悟漸修なり、敎家は衰弱せる病人に對し、藥をすすめ滋養物を用ひ、日月を経過し、遂に健康体に復するが如し、之を要するに漸修頓悟なり。吾人の考ふる所によれば頓悟漸修は宗教的天才に之を用ふべし、漸修頓悟は通常一般に之を用ふべし。今時の信仰派合理派亦此の如くならずんば非ず、合理派は理義の辨詳にして機關誠に能く整備せるも、ややもすれば理致たる信仰を忘却せんとする傾向あり、信仰派は直に信仰を得んとして却て邪見憍慢に墮落することあり、されど其本來の性質より之を云へば、合理派は其合理のきはまる所信仰に入るべく、信仰派は其信仰の説明として合理ならざるべからざるなり。无住法師禪教に四句分別を下して云く、(1)有禪無敎(2)有敎無禪これ中品なり、(3)禪敎俱有これ上品なり、(4)禪敎俱無これ下品なりと、今日の敎界またまことに圭峰禪師を要求するものに非るか。

福智論

こは十之四句中第五に位するものなり、福とは曰く福徳なり、今日の言を以てせば功利なり、智は曰く智慧なり、信仰の眞智なり、今無住法師の云ふ所をみん、菩薩の万行は六度に接し盡す、前五は福第六は智なり、五度は商人の如く般若は導首の如し、五度は采色の如く般若は膠の如し、五度は土器の火を以て焼かざれば用るに堪へざるが如し、般若を行ずれば火をもて焼て堅からしむが如し

と云へり、布施般若なければ福德あれども久しからずして沈淪し、持戒は天善趣に生じ、忍辱は端正の報を得精進は強剛の報を感じ禪定は有漏の天に生すれども皆解脱の道に非ず、箭を以て天を仰ひて射るに勢力盡きて地に落るが如しと云へり、般若徹照の信解なければ彼岸の義なし、祖師誠て有相の福は第三生の怨なりと云へり、般若無著の解了觀心の薰習なくして、着相の愚癡心を以て作す所の福業は、次の生に人天の間に生して富貴威勢を得て欲樂を恣にし罪業のみを造て、第三生に必ず惡道に入ると云へり、法華の一念信解の力多却の五度の行に勝たりと説くは此故なり、但し佛の所にして作る所の善根は朽ずして遠縁となる事はあるべし、近く解脱することは難かるべし、近代の大乗の行人の中に、偏に遮詮の法門を執して事善を輕くし、福德の施戒等を行ぜず、さらばまして五欲の財色此を棄つべし、然るに邪見人は惡をは空なりと恐れず、善をば著なりとて行ぜず、實に顛倒邪見なり、善人は空を聞ては著をすて惡をなさず、善を修しては我相なく熱心なし、邪見人は空を聞ては善を退して惡を怖れず、天台の云く、眞の無生の人は福をすら尙ほ作さず、何を況んや罪ぢやと作さずと云ふは必ずしも作さざるにはあらず作す心のなきを云ふなり、

思ふに般若の眞智之れが根底となるに非れば、種々の福德眞の福德たる能はざるなり、世の所謂功利なるもの如何に壯大をさむるも、箭を以て天を仰ひて射るに勢力盡きて地に落るある如く、皆これ有漏相待のものなり、獨り信仰の眞智

あり、永却不動の大樂大安を得べけんなり、嗚呼世は滔々として根なし草の功利に走り、永劫不動の根底を得んとする人なきを悲しき、又大乗の行人、空を惡執して惡をは空なりとて恐れず善をば執なりとて行ぜずと、これ學大乘家の墜りやすぎ罪井なり、ろもく因果應報廢惡修善とは佛敎の通軌なり、唯そが執を破せんがため之を空するなり、大乘家やしもすれば惡平等に墜ちんとする傾向あり、察せざるべからず、嗚呼昔の憂は今の憂なり、無住法師の嘆はまた今日の嘆ならざるべからざるなり。

日曜講話

信心歡喜の靈感

近角 常觀述

今日の講話は信心歡喜の靈感といふ題であります。信心歡喜といふ語は皆様已に御聞の如く唯一句の語てはあります。信心の極要領を言ひ顯はした語であります。何うしてか、信仰の極要領を言ひ顯はした語であります。廣漠なる佛敎の眞髓を言ひ顯はされたのであらうかといふと、即是親鸞聖人が有りと有らゆる經文を讀み、有りと有らゆる經驗を積むてこれを自己の内心の陷輪に入れて、もう純粹に鍛へ上げて言ひ顯はされたのか此言葉であります。こゝにいふと一寸自

力の様に開ゆるか、これは實際信仰に入る道程である。よく考へて見れば幾多の經驗を内心の陷輪に入れて立派に一まじめにする事か出来て、無始以來長い間燻て居た心か自然と融けて來るのは只事とは見へない。全く佛の大光明に催さるゝのである、さてかうなれば人生の總ての事に於て、光明を見出し歡喜の情は滾々として盡きない。此心持を一言に言ひ顯はしたのか信心歡喜といふ語で、實に能く親鸞聖人の信仰状態が顯はされてある。これは理屈に非ずして味の方より來て居る。經文には偉大なる佛の境界より、相對の人生に向て手を下して、有らゆる十方の衆生を佛の境界に引き上げて下さるゝものは偉大なる佛の本願力である、佛の意志である。それで經文には至心樂欲生我國等といふ語がある、信樂といふは佛陀を信し樂ふ心持である。親鸞聖人の信仰程要領を得て居るものはない、佛敎の門は澤山あるけれども佛を信し樂ふといふより外はない。これから佛を信する心持を聞いて戴きたらう。

先づ私か現今の内心の有様を告白致したい、近頃殊に私か苦悶々々といふ事を入釜しくいふから或は却りて諸君に苦を促す様な傾があるかも知れない。然し私か殊に苦悶といふ所には、全体多くの人間は餘り得意になつて居るからいかぬ。世界の人間は表てには樂し相に見えては居るが内心實は大苦痛であるのか多い。苦痛をいふた爲に切角是迄喜んで居た人迄も苦に引き入れる様だが、實は苦しんだ方が宜いのである。こゝういへは實に極端な様であるが、私は不面目なる人は先づ一度谷底につき落すか宜いと思ふ。昔より獅子か子を生むと直

く、之を千尋の谷底に蹴落して再び上り得るや否やを試むるといふが、實際苦悶は信仰の堂奥に達すべき徑路である。然し苦悶せねばいかぬといふのではない。扱今日は此苦の方面は止めにして信仰を得た後の樂の方面の御話を致します。信仰を得た後は少しも苦はないかといふに決してそうでない。私は嘗て苦悶をしましてから以來茲に七八年常に佛の尊き御慈悲を味はして貰ひ、現社會の複雑なる間に處して大なる御蔭を蒙りて、もう佛かなければ到底一刻も安堵して居る事は出來ない迄に深く感しして戴て居るのであるか、なほ苦は依然として存して居る。然し苦しむても昔の如く燻る事はない。欲も起る、腹も立つ、憎ひ、可愛い、昔の私も今の私も更に變る處はない、同じ人間である。親鸞聖人の御言に竊に慮るに、一切の群生海は無始よりこのかた、乃至今日今時に至る迄穢惡汗染にして、清淨の心なし、虛假諂偽にして眞實の心なし、と實に一切群生海は無始よりこのかた今日今時、即十月二日の只今我等も、少しも清淨眞實の心はない、此言は人生の極を言ひ盡されたのである、實に尊い言である。又次の御言に、是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行し給ひし時三業の所修一念一刹那も清淨ならざる事なく、眞實ならざる事なし、如來清淨の眞心を以て圓融無碍不可彌不可説不可思議の至徳を成就し玉へり、如來の至心以て諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に回施し玉へりと。こゝで深く味はして貰いたい。無始より以來今日今時まで迷ひ苦しむて居た者を、唯信仰一つによりて如來清淨眞實の至心を感得さして戴くのである。又此

言を以て見れば至心は是れ佛陀の方に於て已に成就し給ひしものである。我身を顧みれば誠に淺間敷呆れ果てたるものである。こんな者に至誠の心かあらう筈は毛頭ないのである。そこで親鸞聖人は善導の言を其儘用ひられて、一者至誠心とは、至とは真なり、誠とは實なり、一切衆生身口意業の所修の解行必ず眞實心の中に作し玉へるを須るん事を明さんと欲す。外に賢善精進の相を現せん事を得ざれば、内に虚假を懐けはなり。貪瞋邪偽姦詐百端にして悪性侵め難し事蛇蝎に同じ三業を起すと雖も名けて雜毒の善となす、亦虚假の行と名け眞實の行と名けるなり。己はこれ丈の善か出来た、これ丈の慈善か出来た杯とは假にもいへぬ。悪性更にやめ難く心は蛇蝎の如くではないか、偶々善をなしたと思ふても、恰も是焚きたる飯の中に砂が混て居る様なもので雜毒の善である、又次の言には若し斯くの如き安心起行を作す者は、縱使身心を苦勵して日夜十二時急にもとめ、急になして頭燃をはろうが如くする者總て雜毒の善と名くと、善を爲して信仰を得よう杯と思ふたとて到底駄目である。我等が爲さんと欲する事を佛は已に成就し玉ひしたのである。

次の言に、何を以ての故に正しく彼の阿彌陀佛因中に菩薩の行を行し玉ひし時、乃至一念一刹那も三業の所修皆是眞實心の中に作し玉ひしに由てなりと。又大經には佛は、欲覺、眞覺、善覺を生ぜず、色聲香味の法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲知足にして染恙痴なし。三昧常寂にして知恵無碍なり、虚偽諂曲の心有る事なし。和顏愛語にして、意を先きにして承問す勇猛精進にして志願倦む事なし、専ら

向の信心の前には穢惡汗染も毫も障りとはならぬのである。この味を感じさして戴けは、其一念一刹那懺悔をなして佛の慈悲を嬉はして貰うのである。信仰は此一念一刹那の繼續に外ならぬ。歩一步地面に足を落ち附くれば、是れ泰然として千里の道も歩み得るのである。決して人生大問題の起る時のみ信仰が顯はるゝのではない。而して其歩一步自若として進み得らるゝのは是正に地盤の堅固なる事を信して居るからである。此確信があればこそ、たとひ其間に躓つく事かあつても、確かに行くへき處に行かるゝのである。信仰の味は茲である、今日今時迄穢惡汗濁の者か一點佛を疑ふ心なく歡喜の地位になつたのは全く本願力の廻向の信心の力である。信心歡喜とは身も心も悦豫するがほばせを顯せるなり、恰も盲者が眼を開けて貰ふたのと同じ喜である。信心を得た者は現生に於て已に十種の益を得て冥々の間に諸神諸佛に護持せらるゝといふ事か説である。彼の日藏經月藏經杯いふ御經はこれを説たものである。親鸞聖人も深くこれを感じたものと見ゆる。故に唯一佛陀中心の慈悲を信すれば、其結果は天神地祇皆我等を守つて下さるに違ひない。念佛は無碍の一道なりといふ御言も其源は月藏經にある。今回の戦争に於て實に危き命を助つた人の言を聞いて深く感した事である。又先日私の知己の海軍々人から參た書面の中に、大なる信心の力は此鋼鐵艦の中に込み込むで満ちて居る、と書いてあつた。其他此度の戦争に於て信仰力の實驗をせらるゝ人も多いてあるう、又兵士の方からも頻りに此種の書を要求せらるゝ様であるが、皆様も可成書面を出さるゝ時には信仰の事を御傳へ下さる様に

清白の法を求めて以て群生を惠利す、三寶を恭敬し、師長に奉事して大莊嚴を以て衆行を具足して諸の衆生をして功德成就せしむとの玉へりと。佛陀は毫も怒の相なく極々柔和なる言葉で我々を迎えて下さるのである。故に我々は煩惱か、また其儘で佛に對へはよいのである、かうして佛の慈悲を感じる度毎に己の心の黒い丈け愈佛の純潔なる心を仰ぐのである。茲に何んな道理があるか知らぬと、こちらの濁が滾々として盡さざる佛の清泉の爲に清めらるゝとそこにいふべからざる樂しみを感ずる。これが信心歡喜の味である。さてこうなると信じなといふたとて、信せずには居られない。又疑はんと思ふたとて疑ふ事か出来ない。そこで華嚴經に曰く此法を聞いて信心を歡喜して無疑者は速に無上道を成らしむ、諸の如來と等しとなりと。佛に對して一點の疑ひなく信仰を起す者は如來と等しとは、全く佛の心かこちらの心に入りた恣である。こうなれば苦しみはあつても疑のある筈はない。又言はく、如來は能く永く一切衆生の疑を斷たしむ、其心の所樂に従ひて普く皆満足せしめんと。又言く信は道の元、功德の母なり。信は垢濁の心なく、清淨にして憍慢を滅除す。信は能く惠施して心にをしむ事なし。信は能く歡喜して佛法に入る、信は能く智功德を増長す、信は能く如來地に到る、信は諸根をして淨明利ならしむ、信力堅固なれば能壞つものなし、信は能く煩惱の本を滅すと。信仰は實に偉大な力を有するものである。

扱こうなつて愈有り難く感ずるのは、前に申した今日今時迄穢惡汗染にして清淨眞實の心なしといふ事である、如來廻

願ひ度い。此危い命を助かつたといふ話も唯幸運といへばそれ迄だが、信仰の上より見る時はそんな茫然としたものでない。前に申した現生十種の益の中には、諸佛護念の益といふのがあるが、此人は正に此益に預かつたのであらう。或は轉惡、成善の益といふのがある。宗教には兎角縁のないのかいぬ。たとひ誘つてもかまわぬ。縁の多い程善いのである。其他信多歡喜の益、四德具足の益、知恩報德の益、常行大悲の益、杯いふのがある。皆一々味ふべきである。

親鸞聖人の末燈鈔の中、信心を得たる人は必ず正定聚の位に住するか故に等正覺の位と申すなり、大無量壽經には攝取不捨の利益に定まるを正定聚と名け、無量壽如來會には等正覺と説き玉へりと。是を以て見るに、常々申して居りまする嘆異鈔とは餘程趣が違ふて居る。嘆異鈔は後の人が作られたもので文章か巧みである。末燈鈔の其次の言には、其名こそかはりたれとも正定聚等正覺はひとつこゝろひとつ位なり。等正覺と申す位は補處の彌勒と同じ位なり彌勒と同じく此度無上覺に至るへき故に彌勒と同じと説き玉へり。何うも文章が廣漠として押へ處がないやうだが、然し此廣漠として居る處に深い味が含まれてある。又他の文章には、これは經の文なり華嚴經に言く信心歡喜者與諸如來等といふは、信心を喜ぶ人は諸の如來と等しといふなり。諸の如來と等しといふは信心を得て殊に喜ぶ人を釋尊のみことには、見敬待大慶則我善親友と説き玉へり。又彌陀の第十七願には十方世界無量諸佛、不悉咨嗟稱我名者不取正覺とちか玉へり。願成就の文には萬の佛に偈められ喜び玉ふと見えたり。すこしも疑ふべ

きにあらず、これは如來と等しいふ文を顯はしたる也、親鸞上人になると實に何うも御經の文句が一々活躍せられてある様に見ゆる。殊に晩年になると彼の信心の人は如來と等しいふ事を非常に喜んで居る様である。聖人は若し念佛する人は分陀利華ちやと譽められた、分陀利華であるといへば、已に凡夫ではないといふのである。聖人が御往生の三日前畫かせられたる肖像の御贊に、超世の悲願聞きしより、我等は生死の凡夫かな、有漏の穢身はかわらねど、心は淨土に住みあそぶ、と。實に大なる見識である。此頃は實に氣も澄み渡る心地よき秋の氣候となり、益佛の御慈悲を喜ばして戴く、こゝやつて皆様が講話を御聞きに御出てになつたのも大なる大悲の御手まわしと知て見れば實に有り難ひ。又和讃には、罪障功德の體となる、氷と水の如くにて、氷をほきに水多し鄴をほきに徳をほし。又、名號不思議の海水は、逆誘の屍骸もととまらず、衆惡の萬川歸しぬれば、功德のうしほに一味なりと。又、盡十方無碍光の、大慈大願の海水に、衆流歸しぬれば、智慧のうしほに一味なり。と、是を以て見れば、營々たる此人生にありながら信仰を得る時は最早流轉は涅槃と變じ、煩惱は菩提と化し、而して茲に人生は全く美化せらるゝのである。こゝやつて此處に集られたる諸君も皆菩薩である。此美化せられたる人生にあつて、尊き佛陀の光を仰きつゝ悠々として進んで行くのである。此間は餘り苦悶の御話をして居ましたから、今日は有難い方面の御話を致しました。

と申す外はありません。それは二人の姉妹がありまして、名は申しませんが、姉が或夜親戚の人が死んだ夢を見たから、不思議に思ふて、其事を語りむとて妹を訪ひました、然るに自身が口を開かざる中、先づ妹より昨夜これ〱の夢を見て、實は不思議に感じて居る所であると語られて、互に顔見合せで驚かれたと云ふ話である。かゝる事柄は何人も多く實驗する事、心は全世界の人を通して皆一面である。たしかに心は平等の理を備へて居る。獨り人間ばかりでなく、動物界悉く普遍のもので亦一様である。彼の癡狂なる虎を取扱ふに、其人の勢ひ如何によりて虎は避易するぞうだか、乃ち相感應するにあらざれば、避易するやうな事はない。此間も或雜誌で愛犬を失ふた人の經驗談が載つてあつたが、頗る適切である。即ち其人の平生愛して居つた犬がふと行衛を失ふて、心當りを尋ねても見當らぬ儘、心にかゝりながら四五日を経過した。然るに或一夜自分の愛犬が悲鳴を擧げて叫ぶ夢を見た、不思議に感じて其日は其儘にして居つた處、又翌夜も同じ夢を見た。如何にも不思議でならぬから人を諸方に派して搜索せしめた處、或山中で殺されて居つたとの事である。心同じければ人間と畜類とても相感應するのである。然らば何事にやらず凡て感應するかと云ふに、一概に断定することは出来ぬ。何せなれば、甲の人が乙を思ふて居ても、乙の人が他の業務に追はれて心散亂して居りては感應することは難いのである。互に誠意正心で相思念せば感應の電流が通ぜぬ事はない。只誠意正心と云ふことは極要點である。

感應

前田 慧雲

昨夜或處に集會ありまして、私に何か話せよとの事であつたから、感應道交に就て自身の感じた事、又は實際に遭遇した事柄を少し斗り述べました處、あとから續々起て皆さんの經驗談がありまして、食卓が大に賑かになりました事でありましたが、感應は事實あり得る事と一概に否定すべきものではない。眞言では我入我と申しますが、大日如來は我に入るか、我は大日如來の懷に入るかとの事でありまして、正しく感應道交の次第である。淨土では衆生佛を見、佛衆生を攝取し玉ふ妙境が即ち感應道交と名けて不可なる事はない。むかし莊子と云ふ人が或日山に入りて居つた處。俄に齒痛が起りまして、殆ど堪えかたい位であつた。ふと母の事を思ひ出して何か異状があるまへかと思ひつゝ、家に歸りて見ると果して母親も齒痛で苦むて居つたとの事は、たしか孝子經に出てありました。古來の例を擧げて見れば限りがないが、要するに感應と云ふことは、心と心が相感じ相通する事、堅く他の一端を叩けば、他の一端に反響を興ふることは事實否定すべからざるもので、敢て荒誕無稽ではない。井上圓了君が妖怪學研究の結果、これ一の神靈的作用なりと淡泊に断定し來ればそれまでの事であるが。人間の心理的作用はそう單純に考へらるゝものではない。近頃の話で、東京の人でありましたが、二人共同し事を同時に感じた實例がある。誠に不思議

生を攝取すると云ふことも、衆生が佛と融合するのも、畢竟佛心と凡心と互に感應する故に融合するのである。而して佛凡相融合するには至誠心が欠けては到達せらるゝものではない。若し衆生の心に少しでも邪念が混入して居るやうでは至誠の心が自ら徹底するのである。至誠と云ふは偽りや飾りの心ではない。然るに我々は迷へる衆生なり、虚假不實の罪を以て充ち満されて居るのである。善につけ、惡につけ、自身の財産を丸出して打ち明すことが難いのである。これ飾り心や偽り心が起り易いからである。如何にせば感應を興ふるかと云ふに、それには盲信が一番に力強い。淨土宗では臨終正念と云ふ。臨終の時ほど人間は一心になりて思ふことが強いから、そこに重きを置いたのであらふ。

更に之を人と人との感應に付て考へても、至誠の心がなくては決して感應するものではない。自身の財産を打ち隠して他に相談した處で、誰でも満身の意を捧げて同情を表する筈がない、飾りや偽りの心があつては、必ず隔て心の生ずるもので、意志の疎通を見ることは出来えない。人が暴行を加えたなら、自分には暴行を加えらる丈の餘裕があるから、退いて自身の行爲に付て反省して大に改むるやうにせば、岐度自分の至誠の心は先方に通じて感應するやうになる。心理的にかくなるのが當り前である。

かく云へばとて幽霊や妖怪を信ぜやうと云ふ譯ではない。よく世間では死んだ人が幽霊となり姿を現すると云ふて居るが、私が云ふのは其意味ではない。佛敎の印度思想でも本有中、定有と云ふて、本有とは我々の現象界を指し、定有は地獄ならば地獄、畜生道ならば畜生道に到達したことを指すのである。中有は即ち死して定有に達するまでの間を云ふもので、死んだ人が現在の我々の姿を現すると云ふ次第は毫もない。此等は感應道交の事と區別して考へて貰ひたい。

極樂淨土論 (其一節)

松本文三郎

抑も紀元前三四世紀に於ける印度教界の大勢を通覽するに、一方には佛教其の隆盛を極むといへども、大聖覺者は既に入滅して弟子空しく遺法を守るのみ。時愈久しくして佛の遺跡は愈大に、人の佛を思ふや又愈切なり。偉人の一たび出づるや、狂熱の人競ひ起る、是れ古今の常なり。佛の一たび入滅して人の之に歸し、之を念ずるに至るは亦勢の自から然るものにあらずや。又他方婆羅門教に於てはウパニシャッド探究的の時代は已に經過し去ると共に、佛教の爲めに一大打撃を蒙れるもの佛滅の後は一意易行門に途を開きて文學を振興し、以て人心を綜攬し既に倒れたるをして再び起し來らんとせり。是れに由りて之を觀れば、佛滅二三百年の後は他力念佛の思想、實に印度の天地を席捲せりといふ亦詭言にあらざるなり、而して婆羅門教並びに佛教は共に此同一時代の思潮に從ひて、古代ウパニシャッドに於ける他方の思想を發展し來り、此に其の易行門を開き稱名念佛の説を爲すに至れるものにあらざるなきか。

極樂淨土の説は元と是れ古代印度の民が、日輪若しくは故國の莊嚴を極力描寫し出さんが爲め、詩的に叙述したりしに過ぎざりしも。後來の印度民人は之を以て現實の邦土となし、之を信じて此間秋毫の疑念を挿まず、其の思想の由來するところの如きは、彼等固より之を辨ぜざるなり。彼等にありては大地樹木は實に七寶之を合成し、微風吹き來らば妙音洵に起り、百種の鳥は亦實に妙法を轉ずと思惟せしなり。是に於て乎、詩的の世界は一轉して彼等が信仰の世界となりたり。若し之をして單に詩的叙述に止まるとせば、佛何を苦しみてか之によりて以て無常の法音を阿難に説かんや。信仰は洵に一切世界を莊嚴す。穢土をして忽然淨土と變化せしむる如きは亦洵に其の難しとするところにあらざるなり。乃ち信仰の益深きに進むに従ひて淨土の境愈莊嚴を加ふ。而して其の一一の語言一々の事物は皆悉く無上不可思議の大意義を有するに至る。若し此に至らば其の思想の由來するところ果して那邊に存すとすも、彼等秋毫之を問ふを須みず。否其の一言一句の末に於てすらも、尚ほ且つ信仰に於ける眞事實の表白せらるゝを見るなり。彼等は唯之を信じ之が莊嚴を觀し、之が妙用を味ひ、至心に感謝するところある、此に足れるなり。是れ實に信仰の微妙となすところなり。

阿彌陀經には、是より西方十萬億佛土を過き世界あり、名けて極樂と曰ふ。其土佛あり、阿彌陀と號し、今現在說法す。

同一鹹味

人生を愛すべし

求道 學人

今は早や古い話になつた、二年前藤村操君が死なれた時に、世の學者や宗教家や教育家が種々様々の觀察やら解釋やら吊文やらを發表した、それも藤村の名が忘れられむとする如く、大抵は忘られて仕舞た、が自分が唯一つ忘れ兼ねる、して又時々思ひ出て、密かに喜んで居ることがある、それは藤村君の自殺に對しての内村鑑三先生の評論(?)の辭で、時の萬朝報紙上に載つて居たもの、自分は今はその意味のみを記憶して居る、

人生は謎ではない、藤村は人生を謎のやうに考へた爲めに、遂に不可解に終つたのである。若しも人が、人生を識らむと欲するならば先づ人生を愛さねばならぬ、愛する人ばかり人生の秘密は悟らるゝのである。

難解の哲學書を讀むよりは、東北の饑饉地に赴き、渡良瀬川の沿岸にのぞみ、饑餓に泣き叫べる、汝の同胞に先づ一片のパンを與へよ、而して汝の恵みに對して、彼等が捧ぐる所の感謝の言辭を受け取れ、その時に初めて汝は人

生を解することが出来る、まことにかの哲學書が教ふるよりも、一層明確に汝に之を示すであらう、重ねて言ふが、人生は謎ではない。自分はこの文を讀んだ時に、初めて身の輕々さを覺ゆることが出来た、なせならば、今迄自分も可憐なる少年の自殺について、不可解なる暗惑に陥つて居たからである、如何様に人生を考へて、苦悶して、自分で自分の身を殺すやうなことが出来たのであらうか、情死などいふことや、又は君王の爲めに身を殺すことや、又身を殺して仁をなすことなどは、兎に角さるべき希望と情實とを有して居ることであるが、藤村君に至りては人生を不可解と感じて、自殺をしたといふことこの自分にはむしろ不思議で、又無理なやうに思はれて、果ては一種の苦みを感じて居た、論といふ論や、評といふ評を一つ々讀んで居たけれども、對岸の火事を批評して居るやうな心地のみであつた、その時に内村先生の文を得たのであつた故、この人のみ眞箇に人生を味ひ宗教をとつて居らるゝのである、まよかと想ふた程である。自分は大學へ入つて近角先生の下に寓する身となつてから、漸く半年経つたまで、あるが、人生に苦悶を抱いて先生の下に來る者が毎日のやうである、或時は朝から夕まで、或時は夕から夜中まで先生と色々話して居るのを見る、先生は求道の門戸を開いて居らせらるゝから、このやうに道を求むるの人々が來るのであらうけれども、世にはかくばかり多くの苦悶者があるのか、して又藤村君の如く人生の苦悶を抱いて居るのか、こんな時に思ひ出づるは、内村先生の「人生を

愛すべし」との言葉である。

内心には虚假の汚れたるを抱きながら、外面にのみ賢善精進の相を現することは、甚だ警むべきことであるが、また實際内心で、人生の愛樂を感じて居ながら、或は口を極めて人生の敢果なきを嘆じ、肉身の汚れ多きを言ふものがある、つまり吾々は、自分等が親しく關係して、或は苦と悟り、或は樂を感じたゞけを、その儘僞らずに正直に言ふことの外には、何の事をも言ふてはならぬものであるが、ともすると、自分々々の領域を越えて、さも言はねばならぬかの如く、種々のことを言ふものがある、釋尊が戲論の誠を立て置かれたのを鑑みねばならぬ。

宗教は、その教祖や宗祖の人が、自ら悟り自ら感ぜられたる所を以て、之を人に語り告げられたものに過ぎぬ、換言すると、彼の人達が、親しく人生を味ひ、深く其經驗する所を親切に述べて残こされたものは即ち宗教である。若しも人生そのものが、自分に取りてつまり風馬牛なもので、有つても無くてもよいものと思はれたならば、何もあんなに苦心慘膽なさらぬでもよい筈である、しかるに御一代を盡されて、人生の種々なる方面に經營せらるゝを見れば、必ずや大に人生を多とし、人生を愛重し、如何にかして之を善美に導き、平和を普からしめむかと、心を碎かれしことは明かである。

しかるを、今の世の人は、人生を惡様に言ひ墜し、人身をば塵あくたの如くに罵り猛りながら、そこに安住を求め、信念を定めむとあせるのは、何たる矛盾の事であらうか。

吾等が、かの物心つきたるばかりの弟妹に向つて、室と机と書とを興へむに、彼等はこの興へられたる自らの所有をばまことに、よく之をいたはり、惜み、如何様にか都合よく整頓せむことをつとむるを見るだらう、試みに眼をつぶりて、かゝるさゝやかなる光景を想像すると、こゝに「人生の縮寫」が浮ぶてはないか、絶對如來の懷ろに抱かるゝ吾等は、まことに、室と机と書とを興へられて驚喜せる、かの弟妹の幼きに似て居る。

しかればかれ弟妹が、そこにさゝやかなる自分の所有を得た時に、これこそ自分のものである、何人にも奪はるゝ恐れのないものだと、信じた如く、吾等も亦た自分の所得——有形無形——を以て、喜び満足することが出来るではないか、自分の所得とは何である、これ乃ち人生そのものではないか、つまり吾等は何人からも奪はれず、破られざる永久の所有として、人生なる重荷を有するのである、して見ると、この重荷を持つて、まことに喜びを感じ、満足を取ることの出来る爲めには、どうしても人生そのものを親しく味ひ、之を愛重するてなければならぬではないか。

大覺世尊は「三界我有也」と言はせらるる。宗教の門戸も、又その堂奥も、必ず、人生を愛する所にのみ打開かるゝこと、思ふ。

聖哲ガイオセネスが、生活を最も簡單にすることの出来る人を以て、賢者だと考へたときに、自分は家を構へず、妻子を蓄へず、唯一卷の書と共に、桶の中に起臥して、一生を送れりと傳へらるゝ、又一箇の木腕を持して、一切の食器に充

見ると乃ちはその指導で光明で希望である。

南村閑話

一 記者

◎ないやうであるものは借金。

◎上の好む所下之に従ふは東洋の習慣であるが、衆の好む所人之人に従ふは西洋の習慣であるやうだ。かゝる相違は君臣の關係深きより自ら湧き出でたる習慣である。

◎禽獸は母を知りて父を知らず、蟲魚に至りては父母共に知らず、これ薄福の衆生なりと、たしか十善法語に出であると記憶してあるが、聖人も逸居して教なき時は禽獸に近しと云はれぬ。

◎今の學習院はたしか嘉永二年頃京都に創設せられたもので、嘉永三年二月四日學習院丁祭祀と云ふものがあるが、これは孔子を祭つたもので、當時の様子は委しく出である。寫本であるからあまり世間に傳はりてあるまへ。(記者曰く献詩は別頁風尙餘韻欄に收む) 先づ珍しさものである。此等の事は今の學習院の人は多く知るまへ。

◎履三聖人之至道、崇三皇國之懿風、不讀聖經、何以修身、不通國典、何以養正とは三條實滿公の撰文にして學習院の榜聯である。

◎又當時の學習院の額に近衛公の筆であつたが、和魂漢才の句があつた。此は菅公遺誠の句で日本人は日本人の魂を失

てたるが、一日川流に沿ふて歩める時、一乞食が手を以て水を瀾ひ飲むを見、赦然として椀を擲ち、且つ嘆じて、「我なほ彼乞食より賢ならざりき」と言はれた如くに、吾々は人生を愛するの至情あれば、そこには必ず一の趣味なるものを發見するやうになる、世の多くの人々が、人生なる概念さへも持つて居らぬ爲めに、苦だとも樂だとも感ぜぬのである、それ故にこそ、無責任な、放縱な、生活をして、自分をゴマカして居れ、人生に對して、判明せる考を以て、日々の生活を送り、且つ自分の決して逃るべからざる、重荷として、人生を觀する時には、苦悶よりも先きに分別が湧く、分別より先きに決心が來る、決心より先きに至情が動く、そうして吾等は身心及び生活の上に、一種の節約を感ぜず居られぬ、戲論の萌芽はこゝで亡ぶる、ろうして向上の精神は、雲を得たる龍の如くにほこりさかるのである。

つめて言へば、人生を愛するの心を起すのは人生を自分の者とするので、つまり人生その者と握手をして親むのである。そこで、吾等は地上に一の據所を得たのである、なぜならばそれからは吾等は他人の寶を數ふるのではなく、自分の爲めの工夫であり、經營であるから、そうして自分の人生であるから、故賢先達の士を見ては、他所ならず親しくも感ずれば慕はしくも思ふ、しかのみならず、彼等の歩み行る其足跡は、やがて自分等の踏みゆくべき道であると感じたり、又その行きついたりする所を望み見ては、自分の心に鞭撻を加ふるてはないか。

宗教は故賢の足跡である、面影である、そうして人生から

はず、むやみに外國に心酔してはならぬとの意味である。一千年前既に此言あり、高見卓識驚くべきである。

◎淺田宗伯は之を和魂歐器として額に掲げてあつた。歐器とは面白い。

◎經師は遇ひ易く、人師は遇ひ難し。(資治通鑑)
◎教うるは學ぶの半也。
◎餒え來れば食を求め飲を欲するは凡ての人の常である。かくして身体を養ふとは知りて居る。しかれども心を養ふ者に至りては實に罕である。孟子は浩然の氣を養ふと云はれたが、四十にして心を動かさざる、孟子の修養の深さを知るに足る。

◎浩然の氣で思ひ付たが其下の句に、
其爲氣也、至大至剛、以直養而無害則塞于天地之間。
と返へり點あるが、更に之を、
其爲氣也、至大至剛、以直養而無害則塞于天地之間。
として以て直と讀むの説あり、これ恐くは先人未發の言であらふ。兎に角養ふの力が必要である。

◎僧となれば遁世のやうに思ふが誤りて、僧位僧綱にかちり付くやうては俗僧である。
◎天台、眞言の佛教は先づ仕入のやうなもので、眞宗法華は店賣りである。

◎近頃運命觀などと云ふが、運はハコブと云ふ義で自身が自身で運命を作るので、別に運命とて天より下るものでもない。雲谷禪師が明の衰了凡に云ふた事が味ひがある。曰く
命自我造。福自求。一切福田。不離自性。反躬內省。感無不通。何爲其

不可思議也

◎荻の儒者、瀧長愷と云ふ人は、徂徠の門下で、有名なものであつた。神儒佛の三道の著述もあつて、佛學にも志を寄せられた。私は此人の七福神の戯書を持てゐるが、其贊が面白い。

戰刺食者。推擊害者。扇揚仁風。震懾智惠。其德如斯。然後百事如意。魚亦可喫。結亦可樂。

◎道は聖人の製作するものなりと、これ徂徠の言。
◎機會とは如何なるものであるかと味巖和尚に問ふたら、されば、庭前の松に一鶴が止まりて居ると假定して、小銃を取りてねらひを定め、正さに發せむとする時のやうなもので、危機一髪の間であり。發せずして止めば機會が去るのである。と答へたそうだ。どことなく妙味がある。

◎イツモ私が同じ事を繰り返へして話すから、老妻に笑はれるが珍しいものは世に澤山あるではない。三度の食事のやうなものて變はるべきものではない。むかしから名人の説教者と雖、三十日とつゝけて話すことの出来るものではない。

◎佐久間象山はなか／＼わらい男だよ、漢學で充分に仕上げた其上に西洋の學にまで達せられた。が、私はさう云ふ人には感心が出来ぬ。何せなれば妾二人も圍ふて其等の嫉妬喧嘩するを見て喜むて居たと云ふ事である。併し策士は策士だよ。

◎そこになると吉田松蔭はわらいよ。花盛の三十二歳で命をおとすまで、婦人に近い事はない。氣力は火の如く燃え上つて、精神のしつかりした人であつた。松蔭が生きて居つ

たなら今の秋の人々は顔色はないのである。

◎林子平は足利尊氏を崇拜してあつたやうであつた。新田義貞にまざる点十個條を上げてたる處を見ても分る。豊臣秀吉が足利家の養子とならふとした事を見ると滑稽のやうであるが當時如何に門閥の重ぜられた事も分る。

◎尊氏を逆賊としたのは水戸公より起り、山陽などが外史にかいてからの事であると思ふ。尊氏も北朝の正統であるから、當時格別譏諷を加へられなかつた。しかし後世の非難は非難として豪傑であつた。

◎自賛毀他は破戒の一也。廢立は自身の信ずる所を敢行するのである。破戒とは名けられぬ。

無題錄

鈴木 卓苗

吾今夏歸省の時「求道學舎とは何を爲す所なりや」との問を受くる一再ならざりしが、其時に予は答へて言へり求道學舎には三つの事業爲さる、曰く日曜講話曰く雜誌求道の發行而してその一は近角先生の塾ともいふべきものこれなりと、友頗る喜ぶ所あるが如し、今や季は秋に入りて吾等再び學舎の人となりぬ、而して今特に記して自らの記憶に供し、又以て世の同志人に告げむと欲するものあり、乃ち求道學舎の生活これなり。

十月一日を以て求道學舎は全然自治体の生活に入れるな

り、從來とても、其精神のみを以てせば自治的家風なりしなれど、むしろ求道塾といふを當れりとせむか、九月下旬ある日同人先生の室に集る、夏季に於ける所感より、今後の覺悟に及びて懇々さとさるゝ所ありて後、先生の口より出てたるは、今後の生活をば全然自治体にせむかとの議なり、その主旨の頗る美にして一人の異議をいふ者なかりしかど、實行難の極めて多かるべしとの憂は各自の胸に貯へられつらむ。九月末日再議あり、議遂に定まる。

◎吾思へらく求道學舎の生活は眞の意味に於ての共和生活なり、家人として吾等は、一の家長を戴かざるなり、無上道を求むるが故に、如來の信の家を家とするが故に、無知にして過失多き生活をば相携へ相扶け行かむが爲めに、その志を同うせる、一團なればなり。無上道を求むるが爲めには何等の障害をも協力を以て相斥くことを辭せざるが故なり、如何なる私情の切なるあらむとも、衷情まことに言ふに忍びざることあらむとも、無上道の爲めの故には、甘んじて相忍び相遂けむと欲するが故なり。

◎又家長なきが故に従つて家従もなく、渾然として一團をなせりといふべし。さればある意味に於ては、家人として各自は學舎の主長たるべく、又ある意味に於ては各自はその家従たるべし、

◎されば世の家庭にあるが如き上下の隔てもなく、従つてその情實らしきもの絶えてなければ、長者の言の必ずしも聽かるゝと限らず、幼者の計のよく用ゐらるゝこともあるべし、

唯如來の信を以て相交はり、無上道を求めて相勵むが故に、協力して共同の敵を拂ひ、共同の幸福を希求して進まむことを欲するあるのみ。さればその間に於て、長者は古き經驗を披瀝して之を幼者に述べ、幼者は長者の跡を鑑みて自分の行歩を進めむとするが故に、長幼の序整然として亂るゝなく、平和の風軒に溢れ、同情の温み堂に滿つるを見む、上の如く之を想ふ、これまことに吾等が生活の理想たらずんばあらざるなり。

吾は求道學舎の生活を名けて宗教的生活と云はむ、人生に於て自主的生活をなすことの修練はこの宗教的生活の效の一なり、

「自身を知れ」とはいと古き言辭なれど、人生に於て斯の如く古くして常に新なることは少からむ。万事を放擲し諸縁を捨し、唯地球の一角に佇立する自己を思ひ見むときに、茫乎として何等の頼るべきなく、捕ふるべきものなきに、自分の足が地を踏みて立てることのみは、確かと感じ得るが如く、人生に於て、をぼろげにても自己の面影を認め得るときに吾は初めて自己たるもの、存在を感じ得るなり、この一事定るとき宇宙及人生は初めて有意味となる、「宗教は自覺なり」といはゞ、まことに人生に意味を興ふるものは宗教なるべし、この意味より見るときには、吾等自主的生活に入りて初めて宗教の門に居るものにあらずや。

自己の家を意識するときに吾等は最も明かに自己の面影を見るを得べく、吾等は宗教的生活を以て、自分の家庭を意識

「菩提を成就すべし」の一句短しと雖も「宗教」を説破し盡して餘蘊なしと言ふべし、

友あり曰く、我は佛像の前に跪坐し、或は合掌し、或は禮拜するを耻づと、何の故ぞや」と問へば、かくせむは吾と吾を欺くが如き心地すればなり」と答ふ、道元禪師の書にあり、

佛は是れ大師なるが故に歸依す、
法は良藥なるが故に歸依す、
僧は勝友なるが故に歸依す、

無垢清淨の光かや
慧日臨るゝの闇を破り
能く災風火を伏し
善く世間を明照す、
悲愷はいかづちの如くに震ひ
慈悲の妙なる大雲の如し
甘露の法雨をそそぎて
煩惱の骸を滅除す。

「觀音經」

實驗の泉

百目木 劍 虹

宗教の概念を捕捉するは宗教の要義ではない。たゞ之を行住坐臥即ち日常の生活に顧みて、折に觸れ、時に應じて人生

しつゝ、不知不識の間に、自主的精神を養ひ得るなり。

諺に「好きこそ物の上手なれ」といふことあり、言辭卑俗なれども中に不滅の眞理をふくめり、今日、教育の神髓は、學生をして其學課に趣味を發見せしむるにあり」となすものと何の異なる所なきを覺ゆ、宗教か人生に力となるはその一の趣味となりて人間の生活の上に臨むにあるべきか、一時代の宗教は次の時代に至れば一種の文藝となるものぞ、こは初めに人が感じたる如し、次の時代には感ずるものにあらざるが故なり」とエマルソンが言へりし如く、電光にうたれたる眼の何時までつづらるべくもあらじ、暫くして頭をあげてその電光の來し方行く方を打眺めては心飽かぬものと見ゆるなり、吾等有する宗教の信念も亦むしる趣味となつて殘るときに不滅の生命に入るものぞ、しからば吾等が人生を愛樂し、之が趣味を感得せむが爲めには、最も親しく人生に接するに加くはなかるべく而して之をなすには實に宗教的生活をなすを以て最も可なりとすべきか。

宗教とは何ぞや、

道元禪師の書に曰く「若し薄福少徳の衆生は、三寶の名字猶ほ聞き奉らざるなり、何如に況んや歸依し奉ることを得んや、徒らに所逼を怖れて、山神鬼神等に歸依し、或は外道の制度に歸依することなかれ、彼は其歸依に因りて衆苦を解脱すること無し、早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脱することのみならず、菩提を成就すべし」と。

の意義を自覺し來り、欠陥の多き吾々人生に就て實驗の泉を穿ちて深く之を味ひ、清き流を汲むのがまことの要點である。所謂修養といふことも遠き所に目をつけるのではない、自身の足下に意を注ぎて物に躓かざることは修養上の最要點である。内觀反省と稱するものもつまり此意に外ならぬ。内觀反省の心なくして徒に道德律や、倫理説を學び得たとて毫も修養の糧とはならぬ。宗教の教理や經釋を窺へばとて之を實驗し一々身に感し其味を知らざるに於ては、人生上に於て何等の趣味と安慰を興ふるものではない。吾等の一生を過ぐる其五十年と六十年たるを問はず、小は小なるにつけ、大は大なるにつけ、一として吾等の指導者となり、教訓とならざるものはない。唯々平常の一細事として漫然之を看過せばそれまでの事であるが、水の流るゝ、たゞ何等の意味がないと云へばそれもそれまでの事であるけれども、逝くものは斯の如しと心に味ひ來れば、自然に無限の妙味が湧き來るのである。心してさげば石も眞理を語るべしとはミルトンが實驗の叫である。蓮如上人が、一紙半錢と雖、これも如來の御用物と仰せられたるも、言や浅いやうだが意は千仞の谿谷よりも深く感ぜらるゝのである。かく實驗の立場より之を看來れば何物でも意味を持ち來さぬものはない。

人は生老病死と云へば特殊のやうに思ふて居るが、決してそうではない。また釋尊當時の特殊の問題でもない。三千年の釋尊已前と雖、生老病死は事實として存在したのである。即ち生老病死は過去永遠の昔より連續して來たのである。會て釋尊が王宮を出て、路、頭白く眼落ち跟々として歩む人を

見ては、忽ちにしてこれ人生一切の運命なりと悟れるか如き、若くは展轉として惱み苦しむ病者に遇ふて人生の無常を感じたるか如き、若くは死せる形骸を見て遽然として驚けるか如き釋尊があらゆる人生の方面を實驗し來て此に求道の精神が勃然として生じ來たのである。

原始佛教の説く所、簡にして要を得たる所以のもの、釋尊が實驗の泉より迸り出てたる清冽の水であるからである。世の人、生死問題と云へば生涯の力を擧げて研究せねばならぬと思ふものあらば、それは甚しき誤りである。現に我々は之を實驗しつゝあるも、自覺の境に達せざる爲めである。自覺すべき問題はすでに提出されてある也。林檎の墜つることはニートンを待ちて知りた譯ではない。而して彼はより大なる自覺と實驗を経來りて彼が如き大發明をなし遂げたのである。

宗教と云へば、特殊の人の學ぶべきやうに思ふものあらば、これも甚しき誤りである。宗教は各自の上にある内の泉である。各自が實驗の手によりて掬ふべきものである。商人なればとて宗教無用を呼ぶの必要もなく、學者なればとて宗教の存在を否定するの要もない。生を享け來りたる以上は、人生問題に逢着せぬ人こそ最も不幸の人と云はねばならぬ。手の達せざる所、足の及ばぬものならば、止むを得ざる事もあらふが、手をも下さず、足をも運ばずして、之を遠く眺め居るやうては、所詮口に味ひ心に會得することは出來ぬ。自ら口に味はずして先づ佛陀の存在を疑ふものに至りては、食はずして其味を知らむとするに等しかるべきか。親の恩を知る

は、身に泌みくくと味ひての事也。辛き、甘きを知るもの、先づ實驗して後の事也。風雨一過、始めて清明の天地を仰ぐのである。人生の慘憺たる戰場を過ぎ來る人の、廣大の慈悲を深く感ずる所以のもの、これ良心に實驗の泉を穿つこと深かければである。例へ其事の小なりとて捨つべきではない、大なりとて固より驚くべきではない。且つ不用意の裡に用意を放たざるやうに勉めねばならぬ。其日々々の出來事に向て心を留むるの深ければ深きそれ、大趣味の源泉が流るゝのである。若し自身を怨みに思ふ人あらば冥想一番懺悔するがよい。若し自身を憐れつ人あらば怒を移さずして靜に自己の足らざるを思ふがよい。吾を貪欲なりと云ふ人あらば退いて我心に問ふがよい。我を憍慢なりと呼ぶ人あらば胸に手をあてるがよい。我を遇するに無情ならば願ひて我行爲を思へ。斯くして反響の聲は心の底より底に傳はり、淺ましき我等の醜き姿は瑠璃の鏡に映るのである。

已に厚くして人に薄きは我等の欠點の一である。我の重きものは他も重いのである。我の輕きものは他も輕く思ふのである。吾の難しとする所、他も難しとし、我の甘きもの、他も甘しと云ふに躊躇するの筈がない。先づ已の手を働かさずして人の手を動かさむとす、これ情に叶へるや。口では彼此と評を下すもの、果して自身に實行し得らるべきか。名譽は進で取り、失敗は人に嫁せずとするもの。滔々皆然りである。要するに人情には古今一貫して渝はる所はない。修養の淺き人、實驗の足らざる人にありて此味を知ることが覺束なき次第である。

鬼角吾等は人の欠點が目につき易い。人の欠點を發見し得らるゝ、又自身の如何に欠點多きを自白するやうなもので大に戒むべきことである。自ら苦かさか經驗の水を嘗めて、始めて他を了解し得べく、子を持ちて親の恩を知ると云ふ俗諺も亦實驗の意に外ならぬ。修養と云ひ、信仰と云ふも此圈内より逸するものではない。坐禪する時斗りが修養ではない。無間斷の裡、事の大小を論せず、實驗の手が觸れ來て大悟徹底の靈境に達するのである。親を喪ふた人が最も適切に佛の慈悲に感泣する所以のものは、蓋し實驗の手が觸れ來たからである。宗教は空論でない。吾等が内心に潜める事實である。遠く求むるに及ばぬ。心田を開拓し來れば、清き流の泉がうに湧き出るのてである。諸行無常の理をきくに及ばぬ。朝より夕に至るまで經驗し得るのである。窓前落葉の響あり、野外送愁の哀を止む。孰れか心絃に觸れざるべきや。汲め實驗の泉は心田に溢れぬ。救済の力は實驗の手にあるのみ。

親燈錄

鶴田 耿介

かんばしき桂花の香いつしか去りて、露けき秋を草葉にすだく虫の音、學舎の庭にあはれなり、燈火親しむべき時とはいしくも言ひし、神心澄み渡りて俗氣遠くはなれぬ、篋底をさぐり過ぎしこし方の文反古を讀みもてゆくに、あやしくも我心を打ちし文こそ出てきつれ。

(前略) われや何が故にかなしき、若き人の常なる戀にはあらず、深き心の泉より迸り出てたるものにぞある、夕ぐれみ寺の鐘かすかに響く頃、世をはなれて犀川(金澤)をさすらひ有情にひびく川の流に催す悲みを誰にかはわかたむ、あはれ花にやどる白露を我涙と誰か知るべき。

ア、我に至純の涙あり、悲しみ高潮に達する時は双頬を傳ふて落つ、されど悲めるものにあらざれば、其あはれさを感ずることかたし。

見よ世にはくさくさの薄命兒あり、あるは朝な夕なの薄き煙に寒蛩のあはれを覺え、あるは罪惡觀のもだえに鴻雁の悲叫を聞く、霜におごれる黄菊の艶を弄び、天にかゝる明月の美をめぐる人よ、彼等にそとぐ一掬の涙はいかに小さ胸にひびくかを思へ。

悲しひ哉されど人の子はあく迄も無情也、悲境に沈む若人はかくしていよく悶え苦しむ。オ、如來よ我を惠めよ。

ア、此文こそ一歳の昔、つゝむに餘る胸のうれひの迸りしものなめれ、思ふ月影清く雁鳴きて流水の音に夜はいたく更けし犀川の畔、そこはかとなくさまよひて、胸に宿す万斛の悲哀をよ、と天に泣きしことも幾度か、余は罪惡に泣きぬ世の冷刻を憤りぬ、されども神は來らず佛は宿り玉はず、心は氷の如く冷かに涸れて、見るもの聞くもの悶々の種とならざるはなかりき。

此文をよみて我胸の蕪きしもことわりなれ、往昔の煩悶兒今やかすかに靈光に接せり古聖のいひけん如く、人身うけがたく佛法遇ふこと稀なり、罪惡深重の凡夫何の縁ありてか千

載一遇の秋に遇ふ、思ふてこゝに到れば先の罪惡今は感謝の種とぞなる。

ア、世間幾多の煩ひの子よ、いみじく殺げたる煩のやつれに卿が罪惡觀の切なることの推されて同情一掬の涙なき能はざれど、卿は罪惡煩腦を斷じつくし心を清くして後光を見んと力むるにはあらざるなきか、これ他力信者のなすべき道にはあらず、自力聖道門の行者がなすべきことにやあらむ。此念は日をふるにつれ愈々ふかく胸に刻み込まれ、晝はそれに苦められ夜はうがため夢平かならざるに至らむ。

嘆異抄はかくの如きの人に教へて

「一切の事にあした夕に廻心して往生をとげさふらふべくば人の命は出る息入る息を持たずして終ることなれば廻心もせず、柔和忍辱の思にも住せざらむ先に、命つきば攝取不捨の誓願は空しくならせおほしますべきにや」

と、いへり。煩惱熾盛の凡夫いかでか自ら罪惡を滅しつくすことを得んや、恒沙塵數の如來は萬行の少善をきらひて名號不思議の信心を吾人にすゝめ玉ふ、煩惱に眼さへられて攝取の光明は見ざりしが彌陀佛は有情をよばふて、生死の苦海を渡らしめ玉ふにあらざるや、わろからんにつけても愈願力をあふぎまいらせば自然のことわりにて、柔和忍辱の心もいでくべし」との我聖人の仰は罪惡になやむ人々のこよなき福音ならめ。

古き文見るにつけ思ひ出でらるゝは、悲雨慘風の過去の歴史なり、我は此見易きことを氣付かずして年久しく自ら罪惡を斷滅して、清風掃々の光明裡に遊ばんと欲し、轉々煩悶しき、往昔を忍びて感に得たえずかくはものしつ。

捨べかりせばなとて吾手にだも觸れん杯や

吾から擧げし杯に

よし毒あらは毒もあれ

溢れん許りのぎ充て、

ほさねば思ひなどやまん

人に恐るゝ田鼠の

小さき心もあはれめど

怖ちて割るべきものならば

毒の甘さを誰れ味はゝむ

やがては消えむ身ながらも

止め方なき心こそ

吾愚をわらふ人の世の

嗚呼をば笑ふ思ひなれ

あゝ夏虫の運命をば

吾身の上に歎ひて

茲に慰藉の花匂ひ

快樂の泉こゝに湧く

黒旋風

窓外の虫聲いよゝく滋し、折から奏て出でし玉の小琴は誰がすさびにや、鼓せざるに自ら鳴る安養淨土の音楽ぞ忍ばる。

風尚餘韻

妖魔曲

毒杯

波岡しける

吾から迷ひあこがれて
便る燈しに身を焦し
あえなく消ゆる夏の虫
汝れに悶えを誰れか認る

たゞ杯のうれしきに
あげしは夢か、夢の間に
酔の進めば今ははた
毒を樂しむ我身なれ

一口づゝにしびれ行く
心臓の甕に驚きて

佛者に彌陀の利劍あり
光芒陸離鞘をばらへば
妖魔十萬忽ちに
野分になびく草の如

天のみ力限りなく
旋風となりて吹き荒む
一陣來りて暗黒は去り
再び吹きて光明消ゆ

いざ吹け吹けや黒旋風
下界の小さき光明と
ためらふものを吹き掃ひ
思ふか儘に力を試めせ

光明かはた暗黒か
あるひは涙かほゝえみか
汝が力の撰むに任かす
起てく旋風力を擧げて

姑息は汝れの探らざる所
公孫樹を吹かば一葉だに
梢のまゝに置くべしや
散してく吹きちらせ

因循は汝か好まぬところ
野面に起ちて狂ひなば
一草だにも残さじと
倒して／＼吹き倒せ

嵐の後に海は風ぎ
闇極まりて光明来る
悲惨の犠牲を捧げて予
平和の神も降りませ

曉

しげる

雞の聲を軍鼓の響として「曉」の軍勢は、潮の岸に押し寄す
るかの様、駿馬に銀鞭打ちつゝ、光明の旗を翳して、さも悠
揚の態度にて夜陰の軍勢目がけて攻せ掛けたり。爛々なる炬
火を打ち振り打ち振り、劈頭に進むは、明星と呼べる若武者
なり、全軍肅々として歩武整然一糸も紊さず、生々活躍の氣
溢れ、雄渾醇潔の色漲り、譬へは王者の軍、天の天命を奉して、
暴戾の虐賊に對ふが如く、實に莊重侵すべからざる雄々しき
けはひ！。暗の一隊、今し旗色亂れ、一人倒れ、二人亡び、西
の方指して逃げまどふ、血の氣失せたる顔は尙ほ猜忌の波打
ち、奸諂の手は戰き慄へ、邪推の冠は落ち散り、懐しき様な
り。折々振り返り／＼窺ふ黒衣の袖も、一枚一枚剝がれて何
處ともなく掻き消すか如くに亡び行く。

面を洗ひ嗽き潔齋して、裏山に登り曉を拜し、生命の源たり、
汚れの救主たるを感謝し、尙ほ力なき身の擁護を默禱して、
暫く神秘なる靈光に浴し、白露を含める新らしき花に撞かれ、
鮮かなる鳥の囀に心酔ひ、やかて家に歸り、大なる勇氣と奮
進を以て、一日の課程に着手するを常とす。

嗚呼偉なる「曉」よ

秋の句

和軒生

野分して果落つる夜そ人戀し
信念の動きさうなる野分かな
一夜來てマルセイユ歌へ秋の雨
秋雨や蜘蛛の巣の張る新世帯
フラト一の思ひ出さる、月夜かな

秋草

歌介

もし世に宗教なかりせば世のさまや如何ならむ、美しき日
の光は下界にかゞやき渡れと罪になやめる人の子の心のやみ
は照さじ、ゆる／＼として流るゝ水の音は長閑なれども煩惱
に迫はるゝ凡夫の胸には平安のさゝやきを與へず、之あるが
ために賤が伏屋に生れしやつれ男は満足を得病膏に入りて命
旦夕に迫りし人々も平安を覺ゆ。
思へば尊くもあり難きは法の道かな、よしやいかめしき伽

かくて光明と暗黒との戦は、瞬く間に大勝の旗、「曉」の手に
歸し、蒼天は全く曉の領圖に歸したり。見よ東天の飾りを。之
れ「曉」の凱旋を祝する喜びの色に非ずや。初めは純麗なる而
も輕快なる灰白の雲表はれ、次で黄金色と變し、眞紅と輝き、
果ては純白となりて山の端に棚引く、氣は清澄にして、耳を
歌れば、靜かなる自然の呼吸をも窺ふべし。朝風にそよぐ青
笹の囁きは「曉」を讚美する歡喜の歌とも聞かへし。小川は詠
ひ、小龍は舞ふ。程なく牧場には羊群れ出て、馬牛は小屋の
口に首さし伸はして、或は嘶き、或は哮ゆ。實に「曉」の光許り
清々しく、希望に富み、生々の氣に満みたるはあるべからず。
ア、曉！、予は曉を想ふ毎に云ひ知らぬ感胸に湧き、清き岩
清水の源の如く、わが心臓より新鮮にせられたる血は湧き出
て、手となく足となく、五体を走るが如き思ひせられ、悪夢
に襲はれて、唸く煩ひを遁れて、自由の片野に放たれたる思あ
り。實に「曉」は身も心も萎え、氣息微かなる者に與ふる復活
の水なり、蘇生の靈樂なり。予は之れによりて奮進の精力を
與へられ、理想の啓示を授けられ、又希望の光に觸れしめら
るゝと共に、憔悴せる心を刺戟し、傷つけるを醫し、汚れた
るを雪よりも清らし、此世の塵にまみれ、此世の戦に敗れて、
血ににじみたるを濯ぎて、懊惱の巷を遁れ、苦悶の絆を蟬脱す
るを得べし。かくて予は靈の翼を身に装ひ、邪念と罪過の境界
を遠く去りて、超然、崇高幽玄なる九皋に翩翔し直ちに赫灼た
る朝日子の壇前に平伏して、「曉」の偉なる力を讃嘆す。
ア、曉！予は予か生命の源泉として、曉を敬ふ、否寧ろ偉な
る力を恐れて、崇拜の念禁する能はざるものなり。予は毎朝

藍の塔は頼るとも夕ぐれ淋しく響く鐘の音には昔ながらの妙
えなる道を含めりたとえ世は朽つとも人は亡ぶとも、此教は
かりは千代にすたれじ、ア、尊き哉靈鷲山上の垂訓！ かんば
しきかな祇園精舎裡千古の言！

二

小兒こそ汚れなく罪なきものなれ、罪なきが故に彼が心に
はもだへなし、其行爲は神聖なり、其言語は天真なり、彼れ
の目に悪人なくかれの耳に佞人なし、新たに生れし悟道の士
は必ずや一面小兒の如き性格を備ふる也。

又或意味に於て小兒は詩人也、もしかれの心情をありのま
ゝ文字に表出し得ば其作物は、美しき情にあふれたる詩なら
む、五月雨の頃田面に鳴く蛙、中秋月あかき夕草葉にすだく
虫の音、あるは身をこがす乳母がなさけの螢虫、なつかしの
母か里みやげ何れ美妙の念を惹起さぐるものやある。
朝は雀のちさの木に囀るよりも早く起き、夜は鴉の啼にか
へる頃寐ぬ、何夢むらんほ、笑める顔の美しさ神々しさ、英
の詩人ウァーゾールズ歌ふて曰く

"The child is a father of the man."

と味ある哉言や。

三

友よ、月清き夕満天の星辰を仰げば天地清麗の氣我袖にそ
ゝがるゝに似たる亦快ならずや、臚にかすむ春宵一刻のなが
め詩人の胸を溶かすものありと雖も、今秋の風にふかれて山
川の靈氣を吸ふのまされるに如かんや、此時此刹那神興は天
より降る露の如く金星の光る間に詩人の胸にやどる。

學習院丁祭詩

論義 御題

記者曰く、左の詩は嘉永三年二月四日京都學習院丁祭(孔子ノ祭)の時、歴々の諸公卿並に學頭講堂に集りて式を行ひ後ち、宮中に獻せられたるもの此階編これ也。世に多く行はれず、珍本のまゝ、善根翁より請ひ得て、本編にかゝく、二三年に世を去り玉ひし久我建通公のものせられし祝詩も此中にあり。記者は更に今昔の感に堪へざるものあり。讀者諸君の清覽を待つと云爾

〔百姓 昭明〕

東坊城、從二位權中納言菅原朝臣長

古典久存何用神。廟堂禮祀講經綸。堯風舜日昭明代。嘉永春同延嘉春。

桑原、正二位菅原朝臣爲顯

萬國咸寧感聖情。便知化德自昭明。滿朝任用皆元凱。遠近協和頌太平。

舟橋、從二位清原朝臣在實

聖明在上衆切熙。今比唐堯德教滋。既仰太平真有象。万邦黎首協和時。

伏原、從二位清原朝臣宣明

稽古唐堯德若曦。平章百姓衆切熙。欽思皇國蒲盧政。不識不知化聖治。

五條、正三位行式部大輔菅原朝臣爲定

元首聖明施德風。股肱賢哲奏成切。百姓一遇時雍日。共喜仁恩政化隆。

清岡、正三位菅原朝臣長村

聖世堪欽堯代風。昭明百姓海隅中。君輝王德臣專義。万

國協和歲亦豐。

清岡、從三位行文章博士菅原朝臣長

聖朝若采重豪英。百姓和同道自明。直逐仁風扇俊德。願懸傲日表忠貞。

澤、從三位清原朝臣爲量

堯德安々智且仁。昭明百姓及黎民。聖時同是陶唐化。万國協和政日新。

桑原、從三位行文章博士菅原朝臣爲政

車書正值大平年。益識聖朝多士賢。万國協和無遠邇。謳歌到處樂堯天。

伏原、正四位下行少納言侍從主水正明經博士清原朝臣宣諭

親陸昭明不德何。黎民於變乃雍和。欽鑑堯世曉々化。嘉永治優幾多。

唐橋、正四位上行大內記菅原朝臣在光

百姓皆明化下民。下民時變自安仁。可知治效於唐盛。無黨無偏聖代春。

澤、從五位上行武藏權介清原朝臣積成

恭侍經筵仰大平。拜恩百姓自昭明。如天仁政即堯世。可識万邦化聖情。

清岡、從五位上守大膳大夫菅原朝臣長

君王盛德屬慈仁。百姓章明四海親。孰識聖賢治化績。協和曜々万邦春。

櫻司、關白政通

攝提正月韶風清。山野春光節望迎。享禮經筵時誼會。可知知

〔溫故而知新〕

倍關太平基。

文章博士菅原爲政

列班齋仰聖明春。溫故功因學習醇。丁祀遠循延喜跡。乃知組豆禮容新。

少納言清原宣諭

時習聖經會侍臣。因循古典此知新。蒼生自偃雍和德。治扇皇風嘉永春。

阿野、侍從藤原公誠

道存數卷聖經中。何做百家言語工。溫故知新身自勉。願酬皇旨盡精忠。

長谷大膳權大夫平信篤

赫々祭儀文教存。溫尋典故道愈尊。正知禮樂新興起。群下齊霏雨露恩。

大內記菅原在光

知新要務定何如。溫故只須諳典謨。苟續翰林世家業。不貪多技做時儒。

四大路、侍從藤原隆意

協和聖政万邦春。溫故右文化日新。天下歸仁太平樂。巍々明德及黎民。

堤、大和權介藤原哲長

學習養成開德門。滿朝君子拜天恩。微臣亦忝聖題賜。溫故工夫難得言。

勘解由小路、中務權少輔藤原資生

尋釋遺經與舊儀。古今損益可隨時。敢將玉帛爲文具。踐實思誠道在茲。

大膳大夫菅原長誠

至教由來傳日東。聖經千古發君蒙。此生何幸知新益。万世

十世稱昇平。

久我、權大納言源建通

學習院中二月春。杏壇嚴穆薦清醇。更知爲是淳溫古。禮典從今日々新。

權中納言菅原隆長

二曜貞明迎仲春。講堂始展祭儀真。東風也是似溫古。吹入書帷日々新。

式部大輔菅原爲定

帝王懋德允安々。政和春陽彌在寬。今日禮儀遵舊典。臣民新奉萬年歡。

正三位菅原長村

多年苦學費精神。汲々孜孜省此身。四庫文書幾千卷。唯斯溫故自知新。

三條、右近衛權中將藤原公睦

舊典再行昭代春。天恩偏仰世官身。書紳自省先賢誠。溫習方知日々新。

勘解由小路、正三位藤原光宙

講經論道自歸淳。學習院中秋又春。爲浴皇恩無際濕。欽思溫故日知新。

豐岡、正三位藤原隆資

巍々聖德不緇磷。長仰經綸體至仁。欲覓孔門時習意。惟須溫故便知新。

文章博士菅原長

蕩々皇恩渥育人。人而不學豈知新。新開講席要溫故。將傳微臣免頓臣。

從三位清原爲量

舜風堯日政無私。聖澤如春草木滋。皇慮偏循古跡跡。知新

永憑溫故功。

古今事蹟數千書法則一身存起居。溫故應知新在此。可言 聖代太平餘

往歲屢開義與仁。即知尋繹欲求新。寸心若是非他事。偏戴天恩 聖德純。

溫故嘗知德化新。陶然無訴悲辛。西歌東調弄春好。堪謝恩波及四海。

獨寄書窓閱古時。春光不覺夕陽遲。花鶯柳燕眼前興。文物感來聖澤慈。

先聖曾言吾有知。知新溫故不求奇。研尋果向心源得。滾々泉流無盡時。

興典春丁儼祭儀。堯天恰比上晴曦。小臣今日作何憶。溫故知新在此時。

不聖効是學之醇。能釋舊聞自得新。無詔聖明教若許。多成他日作師人。

依舊新祠古聖堅。講堂盛時發經筵。吾曹何幸浴皇化。共仰儒風嘉永年。

堯德舜仁日々新。霞煙齊颺萬方民。今還大室千年昔。仰拜聖

非藏人、橋本安藝橋堯寬

松室、阿波重甫

坂川備中、秦親雄

細川下野、源常典

大賀備後、平宗時

山口、式部大返紀厚生

渡邊、右近衛將曹源供

平本、左兵衛少尉藤原正香

座田、左兵衛大尉紀維貞

圖嘉永春。

何幸微軀拜杏壇。溫尋故典祭儀尊。東風初上黃袍袖。知道新陽日氣暄。

聖學從來在切身。不須記問費精神。孔門平日爲何事。只繹舊聞要得新。

儒門先覺講書經。籬內秦盛與德馨。祀典今春尋舊事。新衣黃色及微冥。

德勉庸行自有鄰。道溫舊故始知新。千年伏祀今年舉。粗豆衣冠羞聖神。

和日東風二月春。杏壇祭記列簪紳。講論溫得唐虞故。侍坐深知教化新。

新刊紹介

極樂淨土論

文學博士 松本文三郎著
博士の該博なる思想を以て極樂淨土論の一編は此に抽寫せられたり。苟も宗教に耳を傾くる人の其所説をきかむと欲する好題目たる也。本論の主とする所、博士自ら云ひし如く、全然是れ史的事實を明らかにするにあり。乃ち信仰對象としての極樂世界、若くは阿彌陀佛を論ずるは秋葉余韻の目的とするにあらざることを明にせられたり。されば本書は信仰對象としての極樂淨土論にあらざるも、他力易行の門は如何にして起りしか、將た極樂淨土の莊嚴の由來する所は如何、所謂史的研究の結果に外ならざる也。先づ試みに博士の自序をのみよ。

と著者の發達の辭として退くるが至當也。兎に角和尙一休は怪誕僧也。釋門由來此種の人物に富むと雖、就中一休を以て上位にあるものとす。著者高島君は頗る氣焔家也。此人によりて此著あり。和尙若し靈あらば地下にありて好知己を得たりとして拍手するや否や。筆の輕妙なるは著者獨得の技。讀者に對して興味を興ふること深し。(定價四十五錢、文明堂)

少年日露戰史

第五編得利寺の巻にして、俄深き玄洋の德事に始まりて、全局の大勢に影響を及ぼすと云はれし、得利寺の激戦を寫して勝利の終結と共に筆を收めぬうれに付けても面白いのは此得利寺と云ふ名であり、得利寺とは利を得ると云ふ意、成程我日本兵の爲めにはこの名の通り利を得ましたが、露西亞に取つては得利寺も全く不得利寺になつてしまひました。例の如く軍國讀本を附録とせり。(定價十二錢、博文館)

金馬將軍

世界七伽羅第六十二編にして、教訓の意を含まれたる説話なり。すらりと書き流し、全編を通讀せざんば止みかたきの趣あり、此編の如きは可憐なる少年を拉して來て、一たびは父王の忌諱にふれ遁れて山中に入り、後ち父王の危難を救ふと云ふ、雄壯なる物語也。軍國の時節柄金馬將軍の名、必ずや少年諸君の歡迎する所とならむ。(定價八錢、博文館)

政教時報

編輯だより

秋も半にして、追々冷氣身に泌み渡り、一たび心を出征軍人の身上に馳すれば、自ら寒うして戦慄を禁じ得ず候。敵と相戦ふのみならず、氣候風土と戦はざるべからざる軍人諸氏の胸中を察し來れば、千萬無量の感相起り候。此際毛布の寄贈は誠に適當なる注意に出でたるものと存候。

夫れ佛教の思想は譬へば滔に洋々たる大海の水のごときか、百川朝宗して悉く同一鹹味をなす、而も其の苟も潰決せんと欲するに當りてや、藪々として奔流し、其に至らざるべからざるに至り、其止まざるべからざるに止まらざるべからざる。然りと雖、史的顯象は偶然にして起るものにあらず、必ずや其由て來るところと其生ずる所以の理由との存せざるべからざる也。吾人は唯其思想を剖折し次第に其源流に溯り、其由りて發するところを究め、此に始めて彼等顯象の奇怪なるが如くにして、而も秋毫奇怪にあらざる所以を知るべき也。史的研究の要は實に此に起る。

博士は如斯見地に立ちて極樂淨土を史的顯象として、廣く諸經を參酌し、博士該博の思想を以て秩序正しく排列せられたり。先づ第一章には他力念佛と題して、印度に於ける他力教の起源を論じて、傍ら歐人の異説を引ききて評論せられたるが如き、頗る見るべきものあり。第二章淨土として、阿彌陀經、平等覺經、大慈見王經等の諸經にあらはれたる極樂淨土を述べて來りて、最も興味を興へられたり。此章は博士の心血を注かれたる所なるべく、余輩は博士の難解なる經文を縦横に讀み去りて一々之を咀嚼し來りて秩序正しく論究せられたるには深く敬服する所也。第三章に阿彌陀佛を論じて、其由來する所を發揮し甚だ精細を極む。此章も亦余輩に益する所少なしとせず。本書に對する多少の異論はあるべし。去れども、最も明白に、史的經題を辿りて奥深く進入し吾人をして、腦中深く印象を興ふるものあるに至りては、博士の勞多とすべき也。極樂世界とはよく人の唱ふる所に於て、其由來を知るに至りては專門の士と雖、苦む問題なりし。最も信仰の極致より之を論ずれば之を知るの要なしと雖、宗教の門に入るに於て之を知るに於て決して無用の業にあらざる也。吾人は本書に對して一の希望するものあり。即ち信仰論是也。吾人の希望に對して博士は筆を執りて一文を草し、本誌に寄せらるゝことを諾せられたり。或は次號の本誌上にあらはるを得ん哉。(定價五拾錢、金港堂)

一休和尚傳

和尙一休の傳は高島圓君によりて著されぬ。著者洵に其人を得たりと云ふべきか。若し自分がせめて禪宗文學の片端でも嚙つて居つたならば一休を躍動とまではゆかすとも、少し氣の利いたなにするこゝが出来たかも知れないが、しかし何分にも甚麼や態度の使ひたけさへ呑み込めなひ分際では筆の運びの上に我ながら齒痒いことが屢々あつた。

高島圓 著

○第二求道會講話記事

○九月十日 第廿九回

近角常観出席

○開極まりて光を見る。眞面目な態度を以てこの人生を體驗してゆく
と人生は中々吾々の内心でかれこれと思ふ様でない、又人生そのものも吾人に對
して、どうも、つれなく、なまけなく看過するやうである、人間は種々理屈をつ
けてそれをたよりに押し進めてゆきたいとがくが、結局人生は思ふ様に解釋は
出来ぬ疑雲、煩悶、社會をうらむ、人生をかこつ、なまけなくなりあつてきなく
る、脚は愈々暗暗のうちに滑り落ちながら、猶ほなまけなくをのぞんで居る、然
るに一朝、顧みて自分の身の上を見れば、戦慄又戦慄、亂雑又紛糾、絶望落膽闊
極るの淵におちつゝある事に気がつく、これの現今迄頼みとせし人生の縁は
もはや、すつかり断ち切られてしまつたのである、孤影、單獨、寂寞、暗黒首を
屈せば、佛陀慈愛の光明は、今正にこの一瞬に直射し来るを見る、亂れたる頭は
忽ち解け、狂へる心は忽ち靜まる、不可思議といふ可く、宿縁とも言ふべきであ
る、この心の身、もはや何等の不安のあとはない、人生これより、眞の人生と
なり、世界これより、不盡の意味を帯び来る、一輪の芬陀利華は、洋々波のまに
まに無限の光を得て、たのしき彼佛陀の御國に、流れゆく、當日聽衆約三十名。

○九月十七日 第三十回

近角常観出席

○信仰の門戸と堂奥 信仰の門戸と堂奥は之を倫理と宗教として見て
よい苟も眞面目な人ならば、この人生に處して、倫理道徳の理想を實現したいと
つとめる、しかし、よくよく嚴密に考へて見ると、中々些細な行ひも、理想通り
にはゆかぬものである、即ち若し倫理道徳を理想通りに行はうとすると、一歩も
進む事も退くことも出来ぬやうになる、自分の一身についても、一家に見ても、朋
友知己に考へても、一國家一社會の上からも亦さうである、彼重盛の時代はよく
不自由な倫理思想の束縛の状態を表はして居る、何となれば、倫理や道徳は、こ
れ信仰に入るの門戸入口で相對差別の境であるからである、然るに、一朝、その
倫理道徳の實行は到底吾人に満足と興へざるのみならず、彼重盛の如き立派な人
てさへ遂に一死を希ふの苦境におしこめるやうな事實を見來り、又それを自分自
分て實驗し、茲にその苦しい倫理道徳の境をきりぬけて、宗教の堂奥、信仰の秘
奥に入り來れば、ひとしくこれ同一鹹味萬人皆仰いで無限佛陀の慈光を拜するの

身の行末を見て下さる、母と共にこの人生を盡きつゝ往くのである、嘗に五十年
のみならず、永遠共に往く事が出来るのであると信じた、すげない、せちが
らい、さみしい、この人生も今や愉快々に行けると信じた、然るに茲に佛
陀は、母の私をおもひ、私の母をおもふその心をつゝみ猶且、人間あらゆる苦悶
を赦きて、大安慰、大慈愛を垂れ給ふ佛陀のいままを聞きては、實にとび立つ思
ひ、これ迄の過程はげにこの門に入りしめ給ふ御計ひと感下れば、實に言ふへ
からざる感想にむせぶ次第であります、人生の事又何の恐るゝ事かなしむ事もう
らむ事もなく悠々進むべき道に進むのであると信じます。當日は近角先生高等學
校の徳風會へ出席の爲め、出席時刻延引、この間藤井文學士の講話あり、實驗の
告白一座感動す、聽衆約三十名。

○同 日

近角常観出席

○絶對の信仰は淺深なし 吾人人生は種々とかれこれやつて見るが中々
理想通りには行かぬものである、言ひかへれば人生は何事も不満足ばかりであ
る、と言ふて中々その不満足を不満足としてすまふことが出来ぬから、いつも心
のうちは何となく不安の雲にとざされて居るのである、然るにその不満足に
至りて、もう仕様がないうとき、ふと、首をあげて見れば、輝々として前程に光を
見る、さて如何なる人も、古今をとはず、東西を撰ばず、絶對の光を仰ぎ見た巴
上は、その道行きの如何を論せず、同一佛陀の光の力なれば、それに照らされた
その心は又均しくひとつである、親鸞聖人の信仰も、法然上人の信仰も、共に如
來より給はりたる信仰なれば、その間一毫の差異はないのである、あの人は信仰
が深い、この人は信仰が浅いなど言ふは、もし信仰に深淺ありとすれば、それは
人間の信仰で、佛陀絶對の信仰ではないのである、一度仰いで彼蒼蒼を見れば、こ
れ即ち天なり、智慧の有無によりては、信仰は左右する事は出来ぬ、むかしも今
も天は依然として天なり、佛陀慈愛の光は、永久に吾等の上にある、流れ行く水
の口こそ異なれ、ひとしく、汪洋はてしなき大海にそそぎ來れば、同一流水、同
一鹹味となる。

である、彼正成の時代はよく自由なる宗教思想の悠々たる光景を示して居る、
その故は、宗教の信仰や、これ堂奥にして絶對無差別の境であるからである、
佛教八萬四千の法門は、皆是、同一信仰に入るの門戸、一度地を掘れば到處に清
泉の湧るを見る、一度縁に逢ふて佛陀慈光の堂に上れば、人生の事蹟々として何
等の束縛ある事なし、眞の道徳活ける倫理、又これより始まる蓋しこれ佛陀偉大
の力を得て進むからである、明治の日本は、これより新に復活せんとするの時、
吾人は今その時に會す、當日聽衆四十名。

○九月廿四日 第三十一回

藤井惠臨出席

○信仰の告白 宗教は自ら日常生活上に體驗して、それから一種の、奪ふ
べからざるものをつかみ、それによりて、安住し、それによりて、活躍するので
ある、私の經驗は、私の人格、家庭、教育等を承知の人は、知つて居られるが、知
られぬ方に、御話します、幼少にして父を亡ひ、以來家庭は母と自分となれば、到
底家を出て、自由に學問することも出来ず、私が出ると母が難儀をせらるゝ、依
て二十一になるまで家に居つたそれから、家を出て種々苦しい中から、學問を繼
ける事にしたが、自分の志のある事が、家の母にも分り、爾後安心して高等學校
を終り、大學に入り、昨年、母が始めて東京見物に來られて、愉快に彼處
此處、手を引いて、案内しましたは前後五日間、然るに五日目の晩から、母は急
に病氣となられたものだから、あらゆる方法を盡して看病しましたが、無残にも
その翌朝、ついになき數に入る身となられたのであります、實に私にこれ迄は唯
天にも地にも唯一人の母ある爲めに世界總てのものが、意味あるものであつたの
に、今やその母は僅に一週間たつたに、この世を去り給ふとは、五日の間
心樂しく共に、話し、共にあるきたるに、今やその影さえ見えなくなり給ふ、嗚呼
人生の總ては皆無意味となり了りぬ、何等のおもしろい事もない、ものたらぬ、た
のもしくない世の中である、そのうち私は新らしき觀念を得て漸く心に安慰を得
て來ました、一蓮院と言ふ高徳の、うの師香樹院の事をかゝれたるうの中に、或
人香樹院の病氣を見舞ひに遠方より來る、香樹院曰く、御前はこの身のいとまごひ
か、この心のいとまごひか、と問はれた、とあつた、私はこれを見て非常に感下
りました、私は今や母なき身であるが、洵に必ずその精神的に永久に、我母と共に
在る事が出来るのであると感下れば、先の不可言悲痛も、茲に解け、人生に對
して更に新らしき意味を有し來るのであります、精神としての母は永遠に自分の

道即佛也

拜啓、佛縁誠に奇なるかな、此間は焦熱の火車中に不圖も
一道の光を仰ぎ、隨喜感歎此事に御座候。
うさたひにめぐるほのふの東路も
俱にちかひの舟となりなき

被爲掛貴意御著書御送與被下御厚意難有早速に拜繙可仕候。
苔に手をつるて戴く清水かな

素より一介の俗物何の趣味もこれあらず候得共、世に二佛二
道なし、信仰の存する所即ち道、道の在る所是即ち佛也。

一すちの道に落合ふ花野かな
右御禮旁々楮外萬々拜姿可申上候。草々頓首
板倉 興 太郎

杜陵の秋

煙雨蕭條の杜陵の里、北水孤村を抱いて遠く風は萬傾の稻に吹き、虫は百草の
露に泣く、今や秋聲たへなんとす、風はますます寒しこゝにひとり住む小生は温
愛の先生の肖像に接していと心温き感ぜられ候。
我れやすべて拙たなし、戀に泣かむには小生が性あまりに愚名に狂はんに予
が心余りに痛となりぬ、家貧なれど飢ゆるに到らず、小生之をうらむの明をうし
ないぬ、非運なれど渾身今に死に到らず、小生は之を償ふるに愚かなり、罵り怒
るの才は余にかけたるか、乏しくなれるにや、今は悲しむ所以を忘れたり、憂ふ
る所以をも忘れたり、そもわれ何人ぞ。
【一 耶】

For my heart was hot and restless, And my life was full of care,
And the burden hid upon me seemed greater than I could bear.
But now it has fallen from me, It is buried in the sea; And only
the sorrow of others throws its shadow over me.

戰時佛教 第一編

贈れ！施せ！一人にてもより多く！

大須賀秀道師著	出征の慰め	最新刊	五版
軍人家族の慰め	最新刊	五版	
忠魂の慰め	最新刊	四版	
戦争の慰め	最新刊	四版	
日本の覺悟	最新刊	三版	
愛國の婦人	最新刊	三版	
勤儉と佛敎	最新刊	二版	
勝利の宗教	最新刊	二版	
信心のすすめ	最新刊	二版	

奮へ！起て！我親しき全國佛教徒！

發行所 法藏館

龍楠先生著 龍楠先生著 龍楠先生著

今井昇道師著 他力安心示談

法藏館編纂

上製 總布シロース背表金文

正價五拾錢 豫約價卅五錢

特製 總布色柔皮卷背表金文

正價七拾錢 豫約價五拾錢

郵稅四錢

發行所 法藏館

京都東六條中珠數屋町 (電話二二五八番)

文明堂出版圖書

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--|--|--|---|--|---|---|---|---|--|--|--|---|---|---|--|--|---|---|---|
| 文學博士 前田慧雲先生著
眞宗教史
二版發行
價六十五錢
郵稅十錢 | 文學士 清澤滿之先生著
精神主義
三版發行
價三十錢
郵稅四錢 | 文學士 清澤滿之先生著
精神講話
四版發行
價三十錢
郵稅四錢 | 浩々洞同人編著
佛教之信仰
二版發行
價三十錢
郵稅四錢 | 南條、井上、村上三博士著
佛教講演集
五版發行
價三十錢
郵稅四錢 | 濱口惠璋先生著
青年之宗教
二版發行
價廿五錢
郵稅四錢 | 精神界記者曉鳥敏先生著
吾人の宗教
三版發行
價廿五錢
郵稅四錢 | 金森通倫先生著
貯金のすゝめ
三十版發行
價廿八錢
郵稅四錢 | 三浦秋水先生著
戦争と婦人
三版發行
價廿五錢
郵稅四錢 | 羽花仙史 澁江保先生著
露西亞闇黒史
最新版
價四十六錢
郵稅六錢 | 文學士 近角常觀先生著
信仰問題
三版發行
價五十錢
郵稅八錢 | 濱口惠璋先生著
心靈修養
四版發行
價四十錢
郵稅六錢 | トルストイ伯著 加藤直士譯
我宗教
四版發行
價七十錢
郵稅十錢 | ベীগマン氏著 杉村縱横先生譯
強肺術
六版發行
價三十錢
郵稅四錢 | 文學士 清澤滿之先生外
續精神主義
二版發行
價三十錢
郵稅四錢 | 文學博士 松本文三郎先生著
佛典結集
新版
價六十錢
郵稅十錢 | 堀内新泉先生著
川千鳥
最新版
價四十錢
郵稅六錢 | 坂田實先生著
健腦法
最新版
價十五錢
郵稅四錢 | 文學博士 井上圓丁先生著
佛教通觀
上下二冊
價五十錢
郵稅八錢 | 主筆櫻井義隆先生 (月刊雜誌)
新公論 (一冊十二錢郵稅二錢)
每月一回發行 (一ヶ年一四四十二錢) |
|--|--|--|---|--|---|---|---|---|--|--|--|---|---|---|--|--|---|---|---|

發行所 東京本郷四丁目 文明堂

發行所 東京本郷四丁目 文明堂

同朋會

毎月一回
十五日發行

佛敎の深遠微妙な教理によりて、健全な信仰を求め、吾々に大安慰を得たいと云ふのが本誌の目的で、村上博士每號平易懇切に人生の指導となり修養となる様に述べられたる講話感語を載せ、一冊郵税共五錢五厘で會員には**一冊郵税共三錢五厘**である、會員となるには會費一ヶ年分(四十二錢)前納すればよいので別に書式も手帳もいらぬ。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| ▲無形の食物
村上博士 | ▲厭世教か非厭世教か
村上博士 |
| ▲活動主義
村上博士 | ▲佛教二大要領
村上博士 |
| ▲三十七の新年
村上博士 | ▲親鸞上人觀
村上博士 |
| ▲戦時に於ける佛敎徒
村上博士 | ▲戦時と信仰と勇氣
村上博士 |
| ▲自力信とは如何
村上博士 | ▲自力か他力か
村上博士 |
| ▲佛敎大師の位置
村上博士 | ▲釋迦如來は私の師匠
村上博士 |
| ▲弘法大師の位置
村上博士 | ▲遠陽の戦捷につき
村上博士 |

發行所 同朋會

十月十二號は慰問施本には最好適なり

佐々木月樵著

救濟觀

定價金三十錢
郵稅四錢
本月廿五日發行

我國民は、今や正に自覺の境に達しぬ。云く、あゝ、世に果して、我等を救ふ佛あるか。我は常にその有無を疑ふ。有らば、明かに之を示せ。思へば、我今如何にして人生の苦悶を脱し得べきぞや、願くば、國に平和を下し、我に安心を與へよ。厭世は我欲する所にあらず、世に必勝を期する、成功の教ありやとは、現に野に迷ふ求道者の叫びにあらずや。本書は正さには是の如き人の爲めに世に出てたり。人々、先づその要目に見よ。

- 一。人生と宗教
- 二。宗教と實在
- 三。實在と救濟
- 四。救濟と解脱
- 五。解脱と安住
- 六。安住と成功
- 七。成功と人生

著者肅々として自から誠め、大悲照護の下に、佛敎の關門を開いて、己が内心の實驗を披露す。文章簡潔、論議整正、然かも切實かくの如きは、蓋し此種の書中甚だ稀也。

發行所 東京本郷四丁目 文明堂

文學士 近角常觀氏著

信仰問題

三版
出來

人、苦悶を経て、初めて人生の真跡義を悟り世界慘憺たる舞臺を過ぎて、終に靈の光明を已に曉天に響き、國民發揮す、今や「信仰問題」の鐘聲は絶大の自覺を生じて火血の間に一大修養の震雷劇雨 耳を劈くの後、功を積まむとす。

本書挿入
眞葉

- ▲米國シカゴ青年會館
- ▲英國議院及ウエストミンスター卿監
- ▲アルトブルヒ城中ルーテル聖書翻譯室
- ▲巴里に於ける萬國宗教大會
- ▲獨逸宗教沿革の遺跡の圖五個

清淨界を出現せむ、國民の地盤に立

鍛鍊陶冶二十世紀の最大理想を現實するの

から此の靈的 需要に應ず 實に本書なるべ

▲菊版二百六十頁 製本高尙

▲上製價六十五錢(郵税拾錢)並製價五十錢(郵税八錢)

發兌元 東京本郷四丁目 文明堂

賣捌所 東京本郷森 求道發行所

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

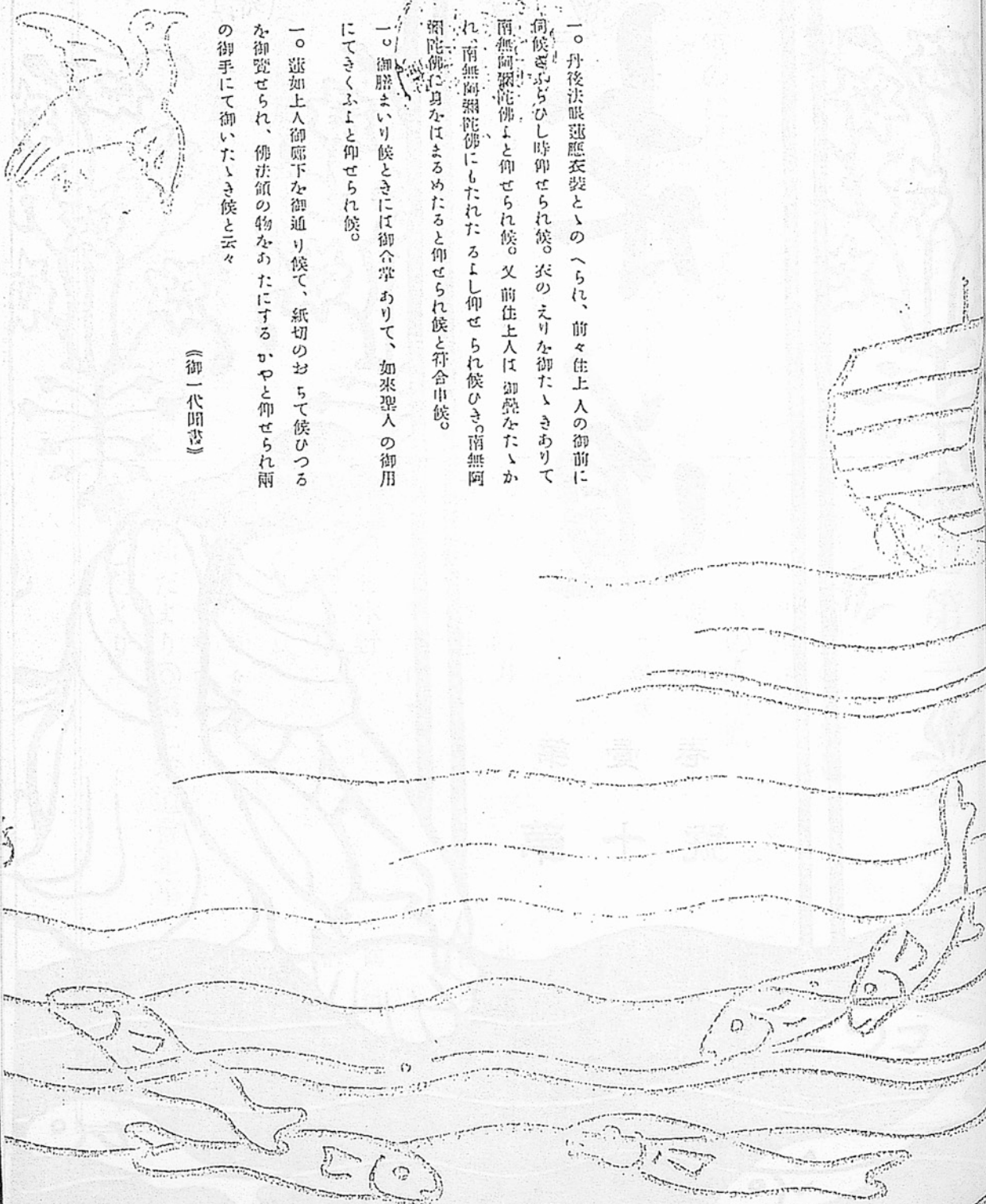
- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十七年九月三十日印刷
明治三十七年十月一日發行

發行兼編輯人 百目木智 幸力
印刷人 白土 幸力
發行所 東京市本郷區森川町一番地
求道發行所 (電話下谷二四三三)

大賣捌所 東京市神田區神保町 文明堂

同 本郷四丁目 文明堂



- 一、丹後法眼蓮應衣裝とのへられ、前々住上人の御前に伺候まひし時仰せられ候。衣のえりを御たゞきありて南無阿彌陀佛と仰せられ候。又前住上人は御覺をたゞかれ、南無阿彌陀佛にもたれたるよし仰せられ候ひき。南無阿彌陀佛に身をほまると仰せられ候と符合申候。
- 一、御膳まいり候ときには御合掌ありて、如来聖人の御用にてきくふよと仰せられ候。
- 一、蓮如上人御廊下を御通り候て、紙切のおちて候ひつるを御覽せられ、佛法領の物をあたにする、こやと仰せられ兩の御手にて御いたゞき候と云々

《御一代聞書》